

1.3.2 バジナ・ケピラ地区

(1) 地質概要

バジナ・ケピラ地区の地質図を図 24 に示す。本地区の主な層序は下位から三疊系、白亜系 Barremian～Aptian 階・Albian～Cenomanian 階・Cenomanian～Turonian 階・Coniacian～Campanian 階・Campanian～Maastrichtian 階、古第三系暁新統～始新統、漸新統、新第三系中新統～鮮新統及び第四系である。

三疊系は種々の色の石膏、黄灰色～暗灰色石灰岩、茶色～茶褐色ドロマイト、白色砂質岩と緑色泥質岩の互層などからなり、本地区北部から西部にかけて分布する。

白亜系 Barremian～Aptian 階は灰色石灰岩と緑色粘板岩の互層、灰白色砂岩などからなり、本地区北西部に分布し、下位の三疊系と断層で接する。Albian～Cenomanian 階は緑色マール及び泥質石灰岩からなり、本地区北西部に分布する。Cenomanian～Turonian 階は灰色板状石灰岩、青灰色マールと灰色石灰岩の互層からなり、本地区中央部に分布する。Coniacian～Campanian 階は灰色マール、灰色泥質石灰岩などからなり、本地区中央部に分布する。Campanian～Maastrichtian 階は主に灰色石灰岩からなり、本地区東部に分布する。

古第三系暁新統～始新統は主に黒色マールからなり、本地区中央部に分布する。黒色マールには石膏や生物遺骸片が含まれる。漸新統は生物遺骸片を含む赤褐色砂岩からなり、本地区北西部及び東部に分布する。稀にマール及び礫岩を挟む。新第三系中新統～鮮新統はレンズ状緑色マール及び赤色粘板岩を挟在する砂岩を主とし、本地区東部に分布する。

第四系は崖錐・崩積堆積物及び沖積層から構成される。崖錐・崩積堆積物は礫、砂、粘土などからなり、丘陵地区や山麓に分布する。沖積層は礫、砂、粘土などからなり、河川又は沢沿いの低地に分布する。

本地区の主要な地質構造としては、ダイアピル、南北系の断層、北東-南西系又は東北東-西南西系の断層などがある。ダイアピルは三疊系によって構成され、北東-南西方向に延びた分布を示す。断層は南北方向と北東-南西方向又は東北東-西南西方向の3方向に発達し、南北方向の断層が北東-南西方向又は東北東-西南西方向の断層を切っている。このため白亜系～古第三系は断層を境にして、いくつかのブロックに分かれ、これらのブロックごとに地層の様相が異なるという状況を呈している。

(2) 重力法探査結果

本調査地区のブーゲ異常(以下、重力と呼称)分布に認められる特徴を以下に述べる。

① 広域重力分布 (図 10・11)

ONM が調査した本調査地を含む広域的な重力分布(図 10)では、大局的な地質構造に平行する NE-SW 方向とそれに直交する NW-SE 方向の方向性が卓越する。昨年調査を行ったプキル地区、ラクワット地区、現在稼行中のフェジェラドームなどの既知鉱床は、高重力異常及びその縁辺部に位置している。ダイアピルは高重力異常に対応する傾向が見られるが、本来ダイアピルは低密

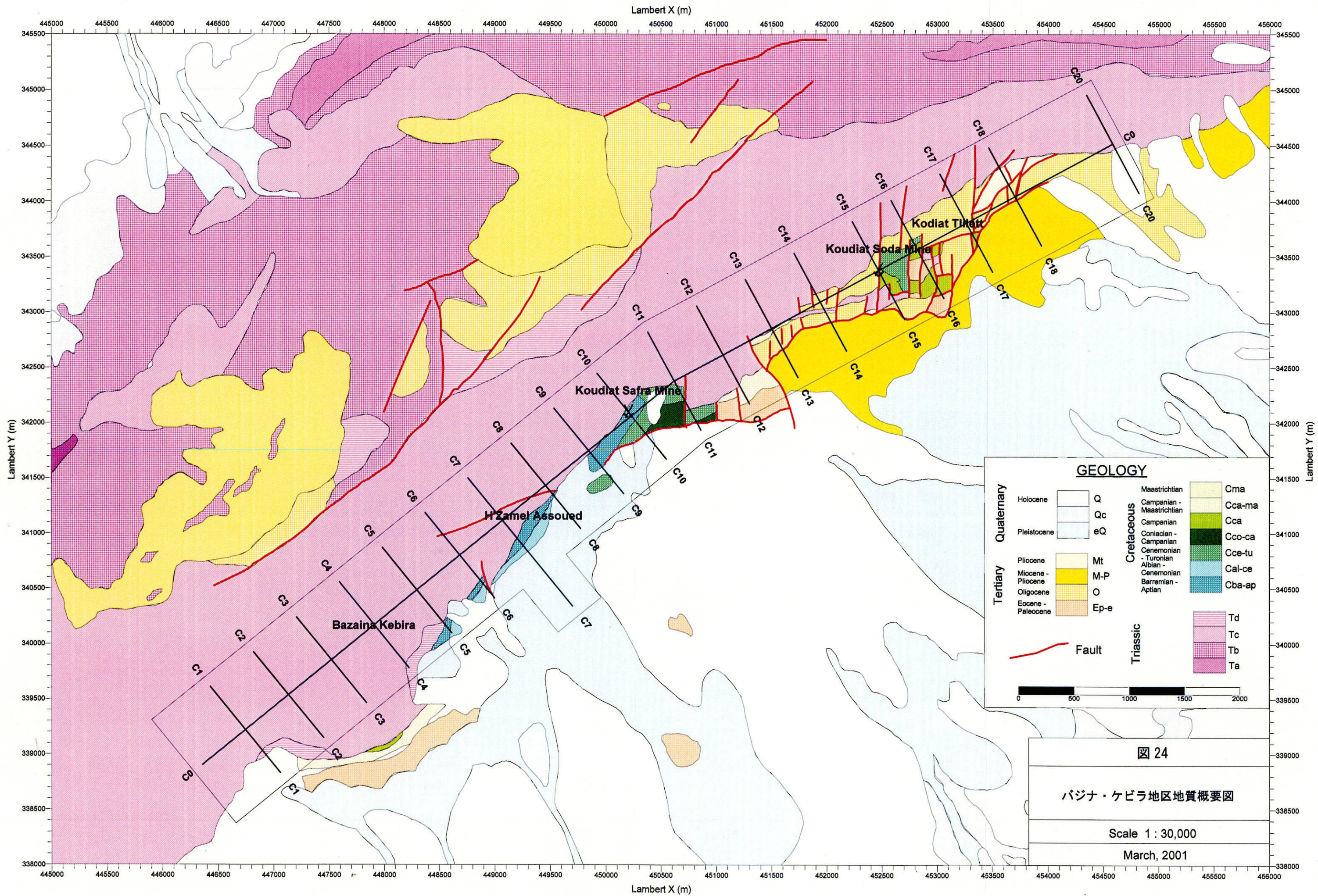


図 24

バジナ・ケビラ地区地質概要図

Scale 1 : 30,000

March, 2001

度岩体が密度差によって上昇してきたものであるので、ダイヤピルが高重力異常を示すのではなく、ダイヤピルに押し上げる背斜構造のような地質構造が高重力を示していると考えられる。

本調査地区はラクワット地区付近の小規模な高重力異常から Jebel Ech Chied 丘陵に沿って北東方向に細長く延びる 0mgal 以上の高重力異常帯の南東側に位置する。この細長い高重力帯の中には 3 つの高重力異常があり、本調査地区は中央部と北東部の高重力異常縁辺部に位置する。Jebel Ech Chied 丘陵の両側にある El Aroussa 平野と TebourSouk 平野には、NE-SW 方向に長い大きな低重力異常があり、調査地区は高重力異常帯から南東側の El Aroussa 平野にある低重力異常への落ち込みの肩付近に相当する。

② 調査地重力分布 (図 25)

調査地の重力分布は Sidi Ayed 鉱山 Koudiat Safra 鉱床周辺の C-10 測線付近を境に北東部と南西部の 2 つに大別できる。

北東部は調査地北西方のランベルト座標(449500, 345000)付近を中心とした-4mgal 以上の大きな高重力異常と、南東方のランベルト座標(455500, 343000)付近を中心とした-17mgal 以下の大きな低重力異常に挟まれた ENE-WSW 方向に延びる-15~-5mgal の重力急傾斜帯である。Koudiat Soda 鉱床はこの重力傾斜帯の南東側低重力端に位置する。

南西部も、北西から南東に向かって重力が低くなる傾向は同じであるが、変化の範囲が-5~-10mgal と北東部に比べて小さく、等重力線の間隔も広い。南西部の一番の特徴は C-7 測線付近を中心とした-11mgal 以上の高重力の張り出しであり、C-5 測線から C-8 測線にかけては重力変化のほとんどない地域となっている。この張り出しは広域重力分布において El Aroussa 平野の低重力異常を NW-SE 方向に分断する高重力の鞍部につながっている。H'Zamel Assoued 鉱徴地はこの高重力の張り出し部に対応する。

③ 残差重力異常 (図 26) 残差重力異常は

本調査地中央部の Koudiat Safra 鉱床付近及び調査地南西部の C-7 測線南東部付近に 0mgal 以上の小規模な高残差重力異常がみられるが、本地区全般には低残差重力域が広がっている。調査地南西部では-1mgal 以下の低残差重力異常が C-1 測線から C-4 測線付近に大きく広がり、C-6 測線北西部や C-9 測線南東端にも-1mgal 以下の低残差重力異常がある。調査地北東部では中央部に近い C-13 測線から北東端の C-20 測線まで基線 C-0 に沿って-1mgal 以下の小規模な低残差重力異常が並んでいる。これらの低残差重力異常は Jebel Ech Chied 丘陵から El Aroussa 平野に向かって張り出す尾根部に対応するものが多い。これらの尾根部の地表では、比較的高密度を示す三疊系ドロマイトの露頭が多く見受けられるので、その下部にダイヤピルと深い関係を持つ低密度岩体の存在を示唆しているのであろう。

C-4 測線付近の Bazina Kebira 鉱徴地、Koudiat Soda 鉱床、C-17 測線付近の Koudiat Tlilet 鉱徴地は低残差重力異常又はその縁辺部に位置し、調査地中央部の C-7 測線付近の H'Zamel Assoued 鉱徴地と Koudiat Safra 鉱床は高残差重力異常又はその周辺に位置する。

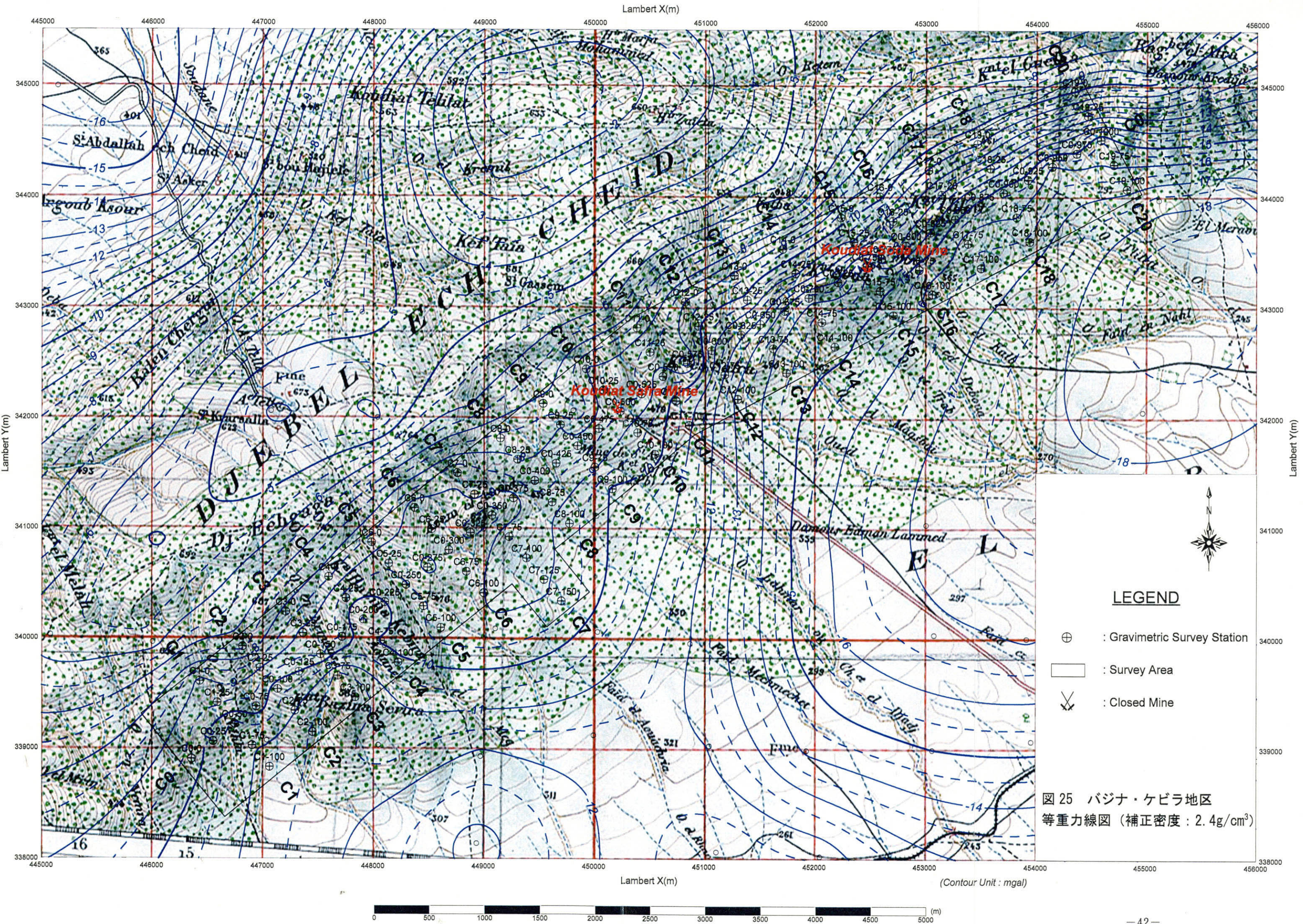


図 25 バジナ・ケビラ地区
等重力線図 (補正密度: $2.4g/cm^3$)

LEGEND

- ⊕ : Gravimetric Survey Station
- : Survey Area
- ⊗ : Closed Mine

Lambert X (m)

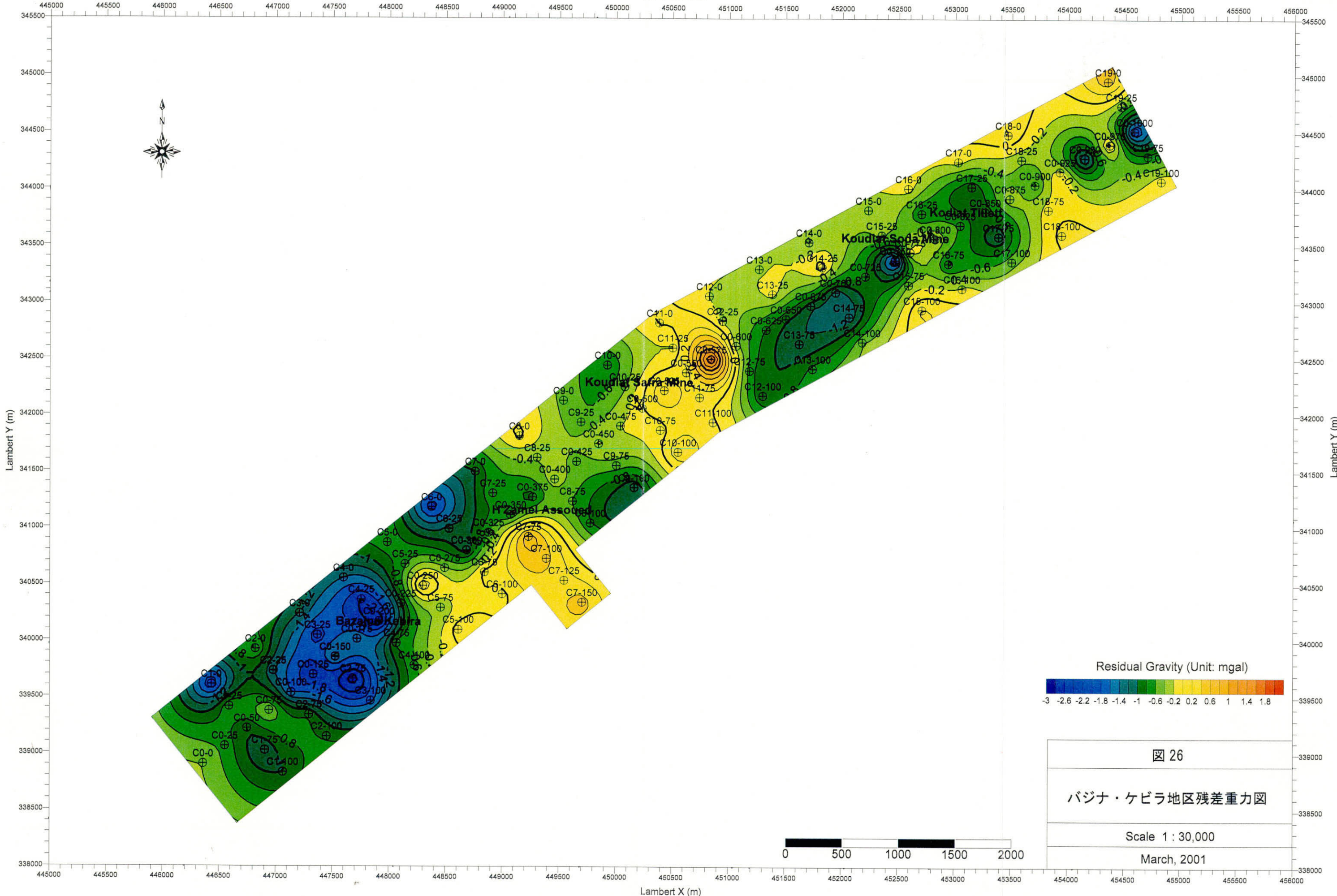


図 26

バジナ・ケビラ地区残差重力図

Scale 1 : 30,000

March, 2001

④ 鉛直 1 次微分 (図 27)

鉛直 1 次微分は重力分布と同様に、調査地中央部の Koudiat Safra 鉱床を境に南西部と北東部に分けることができる。調査地北東部では、C12-25 と C20-15 を結ぶ ENE-WSW 方向の線に沿って 0mgal/km のコンターが延び、その南西側が低い領域となっている。0mgal/km のコンターは地表で認められる三畳系と白亜系の接触部より、北西の丘陵側を通っている。調査地南西部では、0mgal/km のコンターは北西部に比べて複雑に入り組んでいる。鉛直 1 次微分の異常の位置は残差重力分布の異常の位置と概ね良い対応をしている。

⑤ 断面解析

バジナ・ケビラ地区の断面解析では、白亜系を密度差 0.00 g/cm³ の重力基盤と想定し、この重力基盤の上位に、北西の Jebel Ech Chied 丘陵側では密度差 -0.10 g/cm³ の三畳系が、南東の El Aroussa 平野側では密度差 -0.15 g/cm³ の第三系あるいは密度差 -0.30 g/cm³ の第四系があると仮定してモデルの深度を決定した。以下に各断面の解析結果について述べる。

・ C0 断面 (図 28)

5 ヲ所の鉱徴地を通り、調査範囲を南西から北東に向かって縦断する断面である。測線南西部では、石膏を含む三畳系の砂岩や泥岩に対比される密度差 -0.10 g/cm³ の低密度層が厚く、Bazina Kebira 鉱徴地を中心とする C0-1000~3000 の範囲では、1,000m 前後の層厚がある。この低密度層の中には地表付近に密度差 0.00~0.10 g/cm³ の相対的に高密度を示す箇所があり、三畳系でもドロマイトの多い部分に相当すると考えられる。同じような三畳系の低密度層は C0-3500~4300、C0-5800~7600 及び北東端付近にも認められる。中央部から北東部にかけての表層には、三畳系よりも少し低密度を示す密度差 -0.15 g/cm³ の薄い低密度層が 6 箇所ほど認められる。

調査地南西部の Bazina Kebira 鉱徴地を除く鉱徴地は白亜系に対比される重力基盤が盛り上がり、表層の低密度層と断層状に接する箇所の周辺に位置する傾向がある。特に、H'Zamel Assoued 鉱徴地の南西側と Koudiat Soda 鉱床の直下では三畳系に対比される低密度層と重力基盤が海拔 -500m 付近まで鉛直な境界を示しており、大きな断層の存在が推定される。Bazina Kebira 鉱徴地は三畳系に対比される密度差 -0.10 g/cm³ の厚い低密度層の中央部に位置する。

・ C4 断面 (図 29)

調査範囲南西部の Bazina Kebira 鉱徴地を通して北西から南東に横断する断面である。断面中央部の C4-70 を境に、北西の丘陵側は三畳系に対比される密度差 -0.20~0.0 g/cm³ の低密度層、南東の平野側は重力基盤が分布する。両者は平野側にやや撓曲した逆断層状の境界で接している。低密度層の中でも中央部の C4-50 付近は密度差 -0.20 g/cm³ の特に低密度を示している。北西端は密度差 0.00 g/cm³ の相対的な高密度を示し、三畳系でもドロマイトが分布すると考えられる。南東側の重力基盤の上部には、第四系に対比される密度差 -0.30 g/cm³ の低密度の表層がある。

・ C6 断面 (図 30)

C4 断面の北東 1km を北西から南東に横断する断面である。C4 断面同様、断面中央部の C6-60

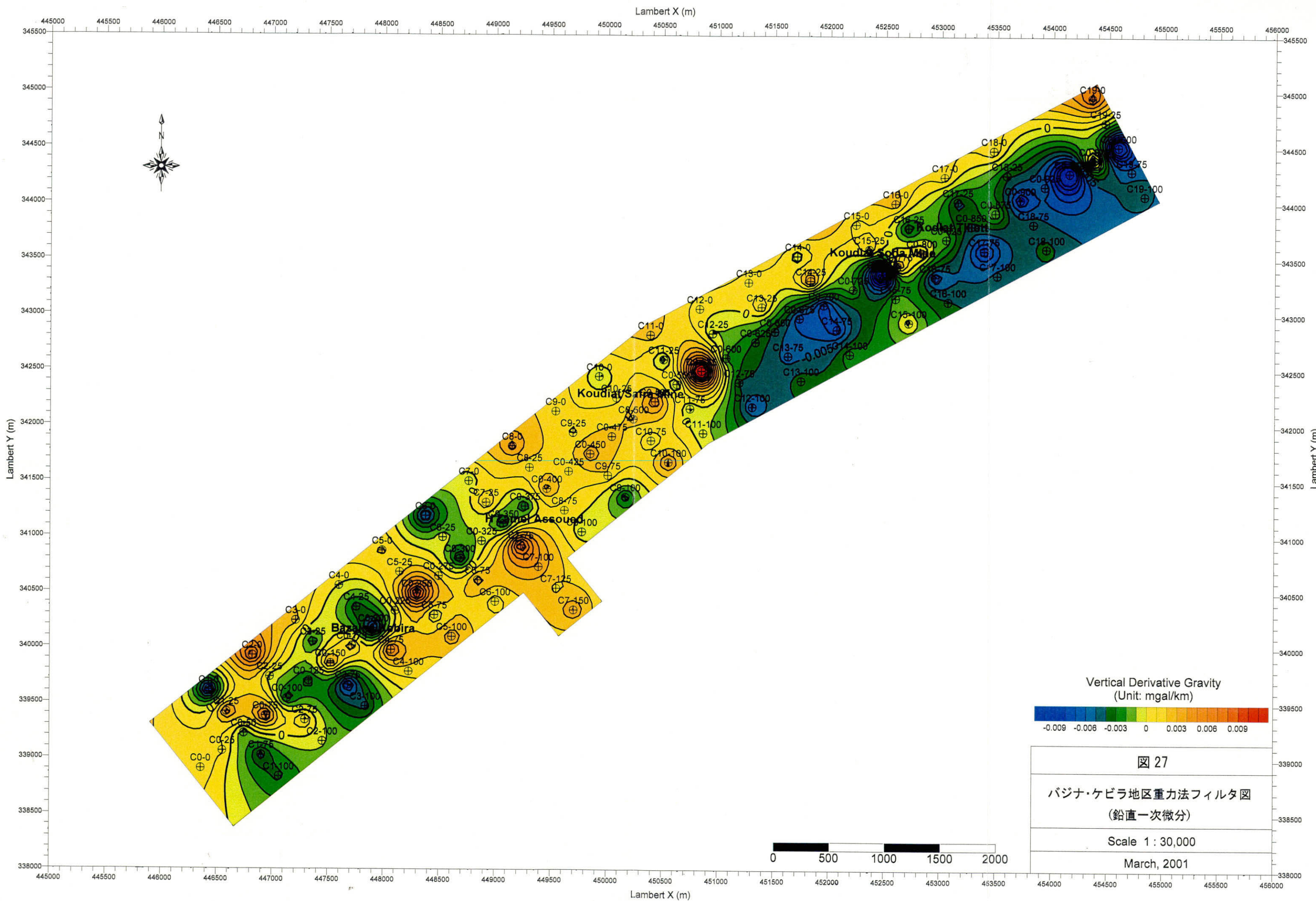
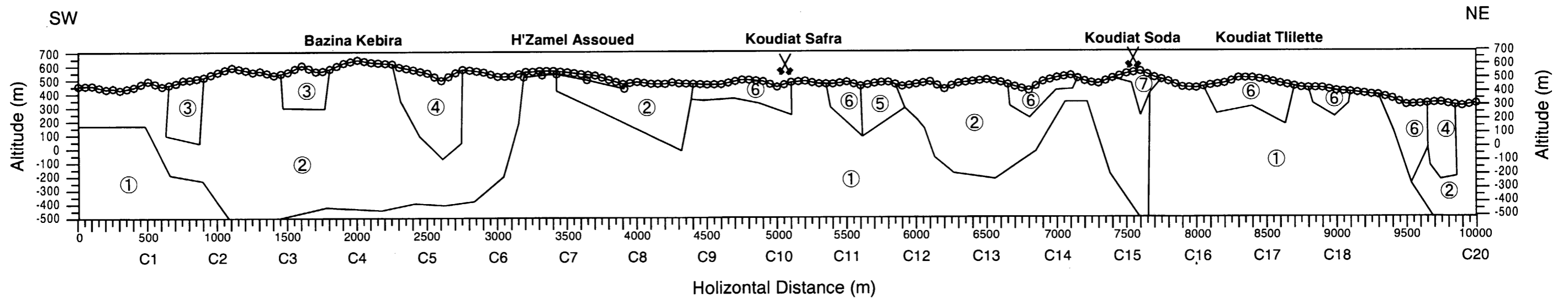
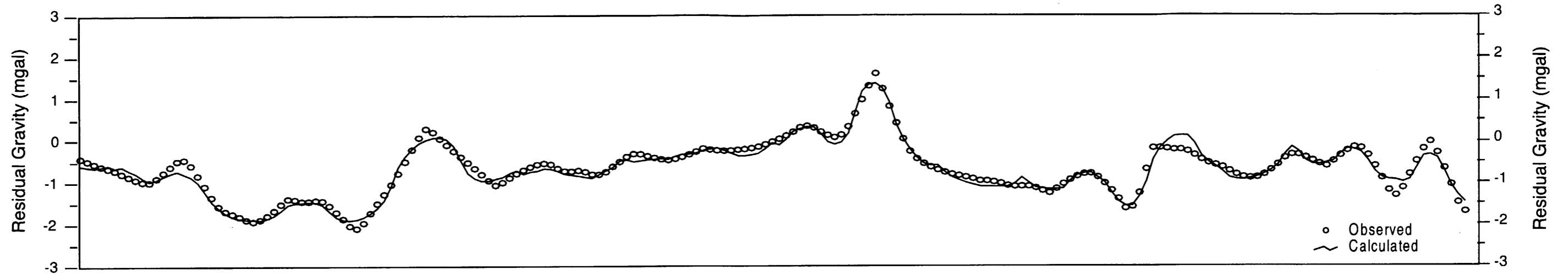


図 27
 バジナ・ケビラ地区重力法フィルタ図
 (鉛直一次微分)
 Scale 1 : 30,000
 March, 2001



Legend

No.	$\Delta \rho$ (g/cm ³)
①	0.00
②	-0.10
③	0.00
④	0.10
⑤	0.20
⑥	-0.15
⑦	-0.25

図 28
重力法解析断面図 (基線C0)
Scale : 30,000
March, 2001

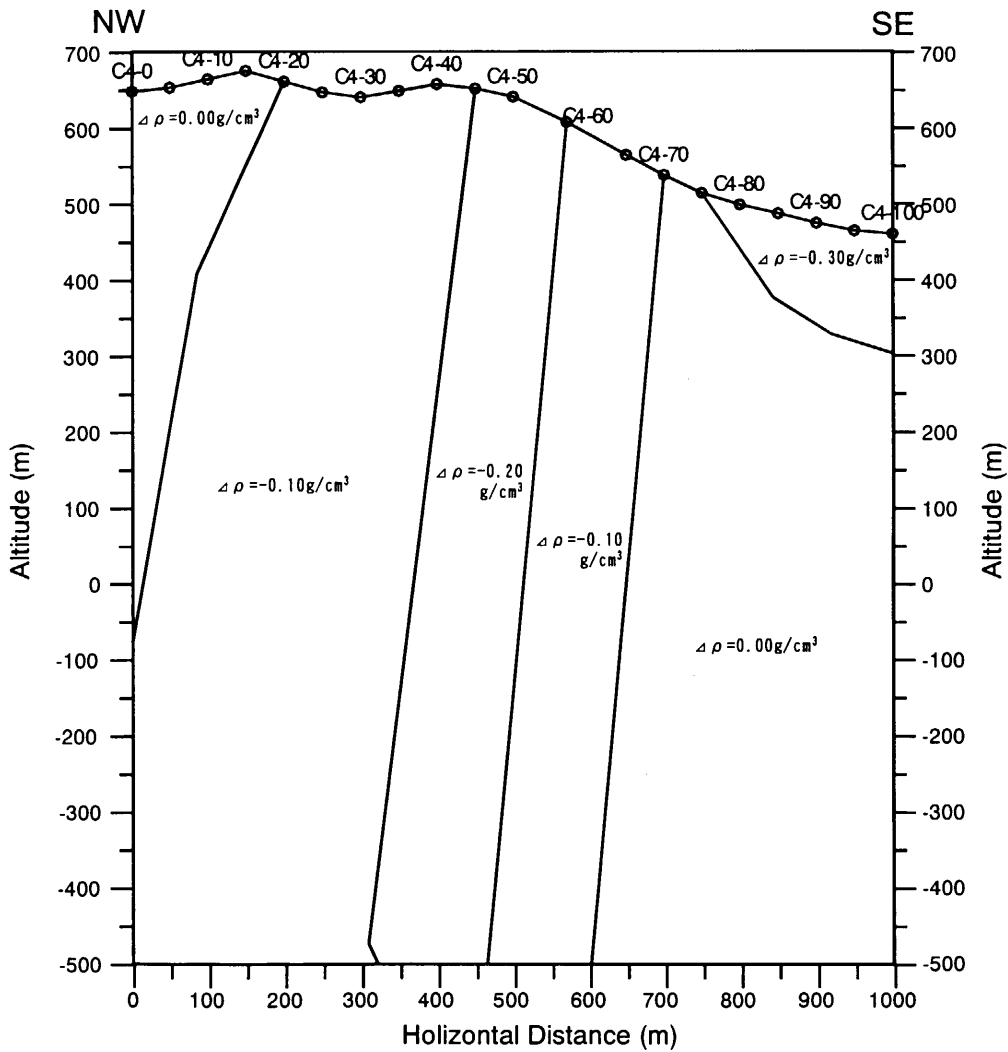
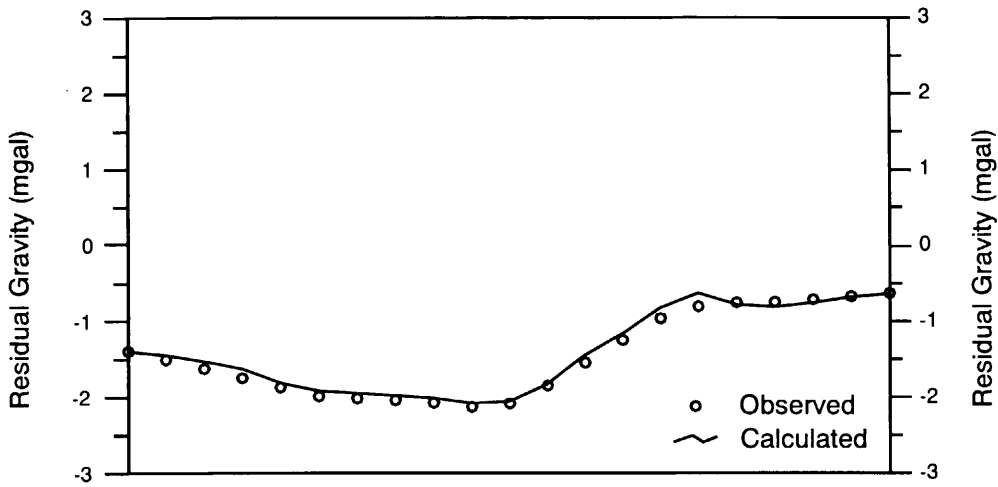


図 29
重力法解析断面図 (測線 C4)
Scale : 10,000
March, 2001

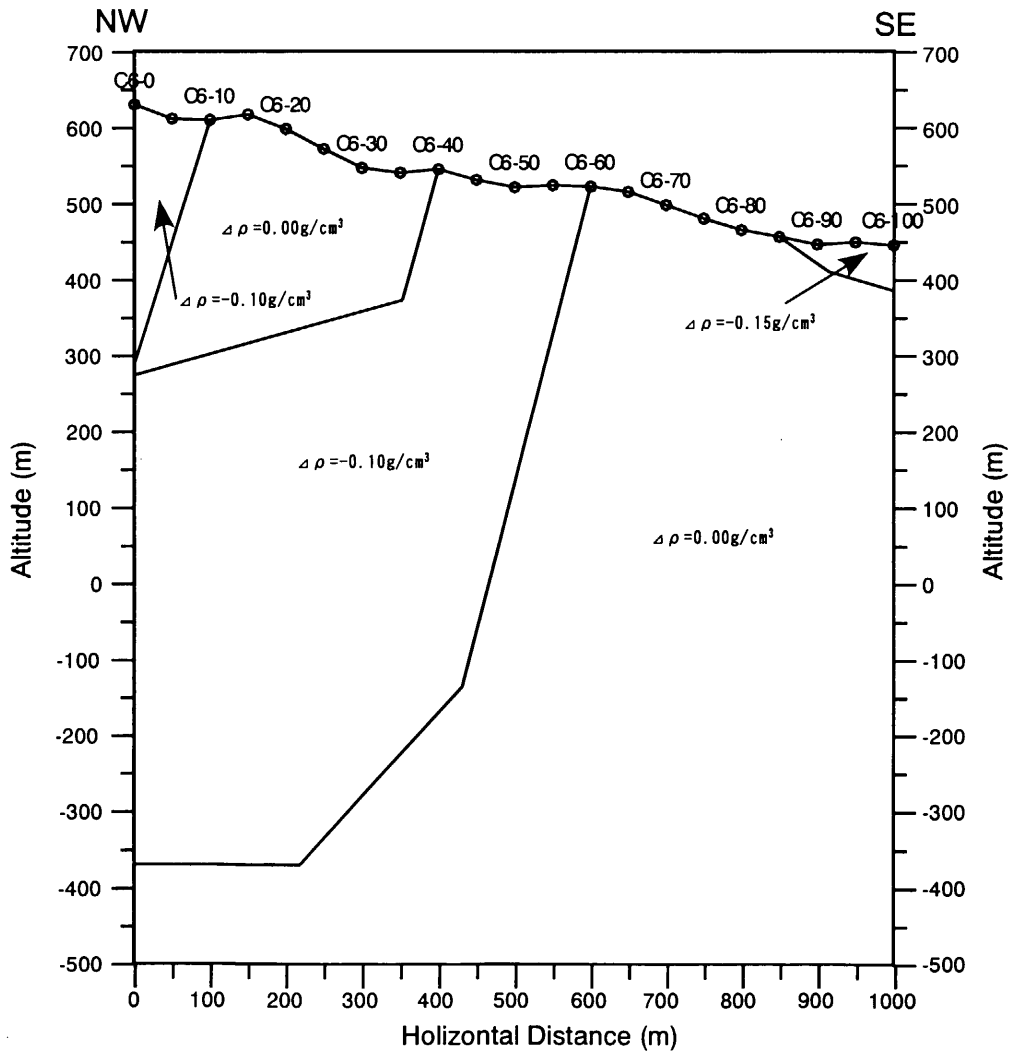
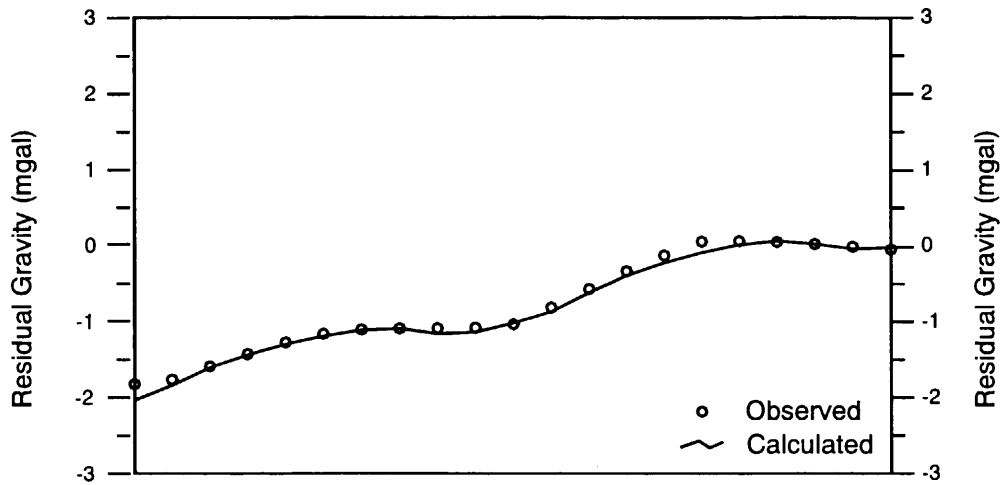


図 30

重力法解析断面図
(測線 C6)

Scale : 10,000

March, 2001

付近にある逆断層状の境界より北西の丘陵側は、三畳系に対比される密度差 $-0.10\sim-0.0\text{ g/cm}^3$ の低密度層、南東の平野側は重力基盤が分布する。断面北西部の C6-10~40 の地表付近は三畳系のドロマイトに対比される密度差 0.00 g/cm^3 の相対的な高密度を示している。

・C7 断面 (図 31)

C6 断面の北東 500m, H'Zamel Assoued 鉱徴地を通過して北西から南東に横断する断面である。C4 及び C6 断面同様、断面中央部の C7-70 付近にある丘陵側に撓曲した逆断層状の境界より北西の丘陵側は三畳系に対比される密度差 $-0.20\sim-0.0\text{ g/cm}^3$ の低密度層、南東の平野側は重力基盤が分布する。三畳系の低密度層の内部には、密度差 -0.20g/cm^3 の低密度部や 0.0 g/cm^3 の相対的な高密度部がある。南東の平野側では、重力基盤の上に第三系に対比される密度差 -0.15 g/cm^3 の地層が分布する。

・C9 断面 (図 32)

調査範囲中央部を北西から南東に横断する断面である。断面北西部 C9-5~40 の表層に三畳系に対比される密度差 -0.10g/cm^3 と南西端の表層に第四系に対比される密度差 -0.30g/cm^3 が分布する以外は重力基盤が広がっている。地質的には C4~C7 断面と同様に、中央部に三畳系と白亜系の境界があるはずであることから、三畳系では相対的な高密度を示すドロマイトが分布しているため見掛け上境界が認められないと考える。

・C10 断面 (図 33)

調査範囲中央部の Koudiat Safra 鉱床を通過して北西から南東に横断する断面である。C4~C7 断面同様、断面中央部の C-35 から北西の丘陵側には三畳系に対比される密度差 -0.10g/cm^3 の低密度層が分布する。この低密度層の南東側は重力基盤の上に層厚 100~150m の第三系に対比される密度差 -0.15g/cm^3 の低密度層が分布する 2 層構造を呈している。三畳系との境界部にあたる Koudiat Safra の地表付近には、砂岩や泥岩から成る白亜系が分布していることから、同じ白亜系でも石灰岩より低密度であるために第三系と区別できなくなっていると考えられる。

・C11 断面 (図 34)

C10 断面の北東 500m を通過して北西から南東に横断する断面である。C10 断面同様、断面中央部の C11-60 から北西の丘陵側には三畳系に対比される密度差 $-0.10\sim 0.00\text{g/cm}^3$ の低密度層が分布し、南東側は重力基盤と第三系に対比される密度差 -0.15g/cm^3 の低密度層が分布する 2 層構造を呈している。第三系に対比される低密度層の層厚は 600~700m あり、C10 断面に比べてかなり厚い。

・C14 断面 (図 35)

調査範囲北東部を北西から南東に横断する断面である。断面南東部の C14-90 付近に断層上の境界面があり、南東側が白亜系に対比される重力基盤、北西の丘陵側が三畳系に対比される密度差 $-0.10\sim 0.00\text{g/cm}^3$ の低密度層であり、断面北西部の深部にも重力基盤が顔を覗かせている。この深部の重力基盤の上部には、同じ密度差の岩体があると想定されるが、重力基盤ではなく、三

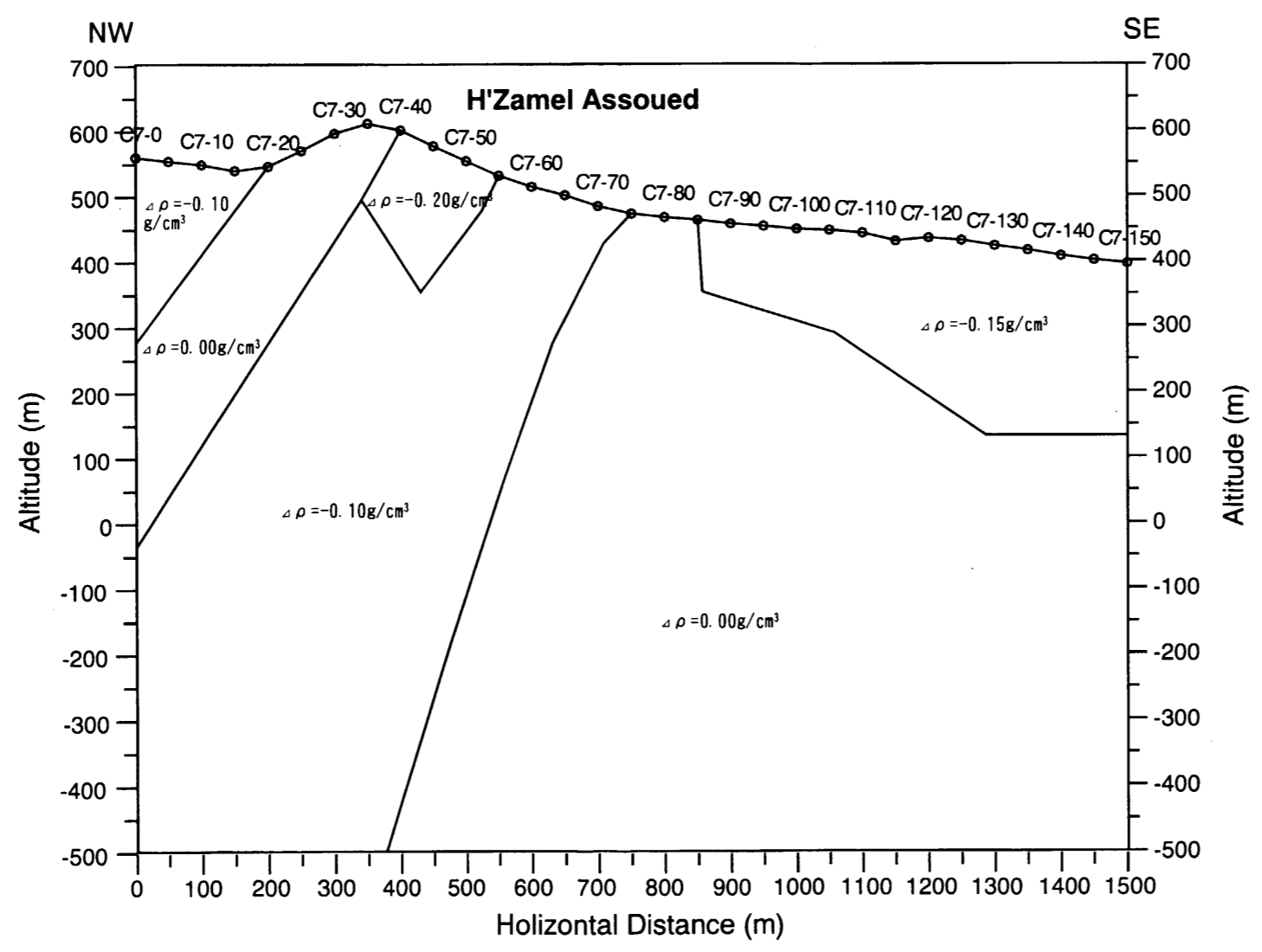
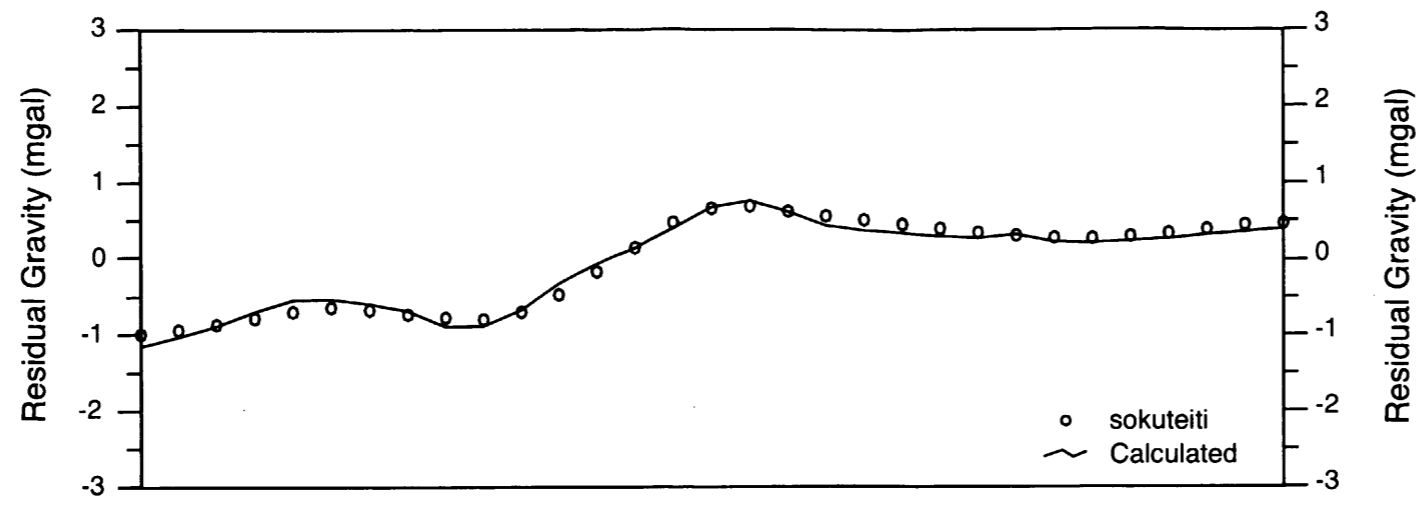


図 31
重力法解析断面図 (測線 C7)
Scale : 10,000
March, 2001

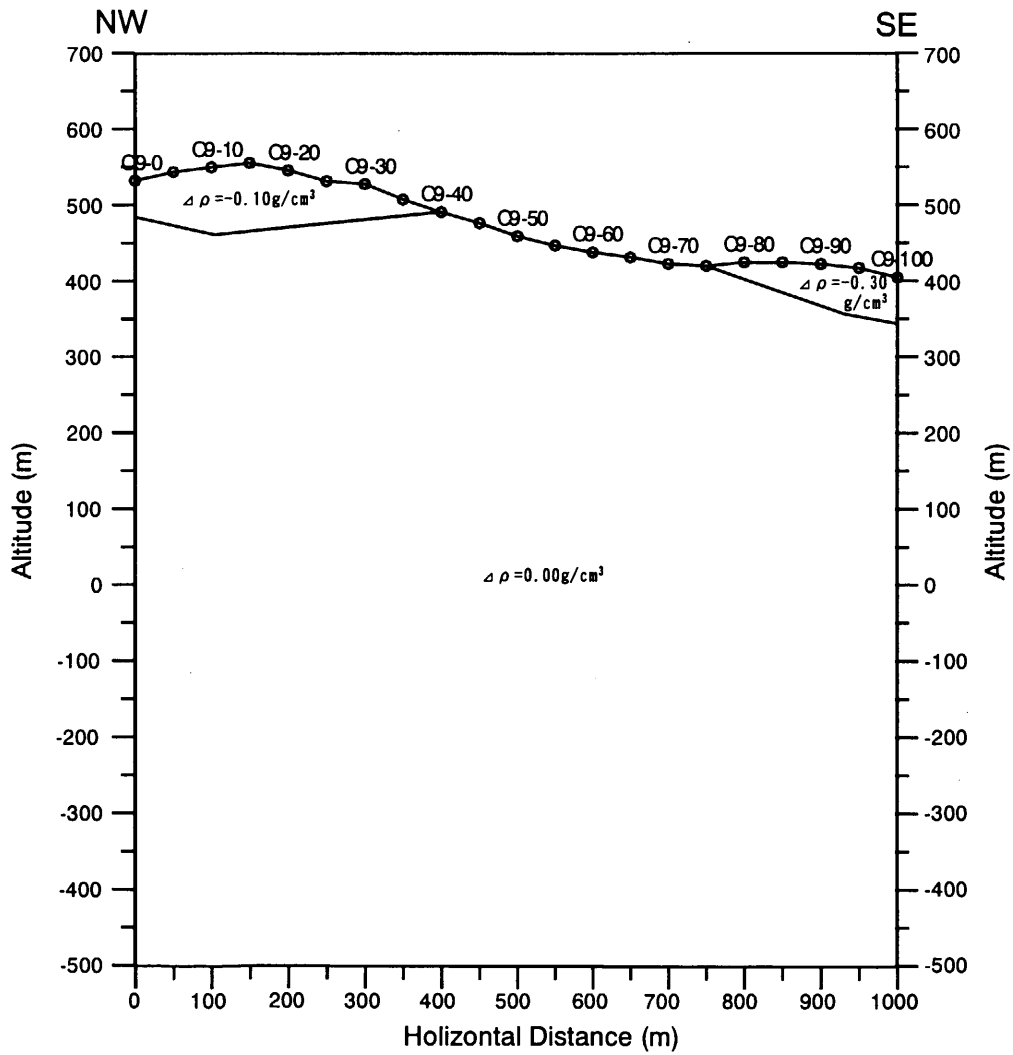
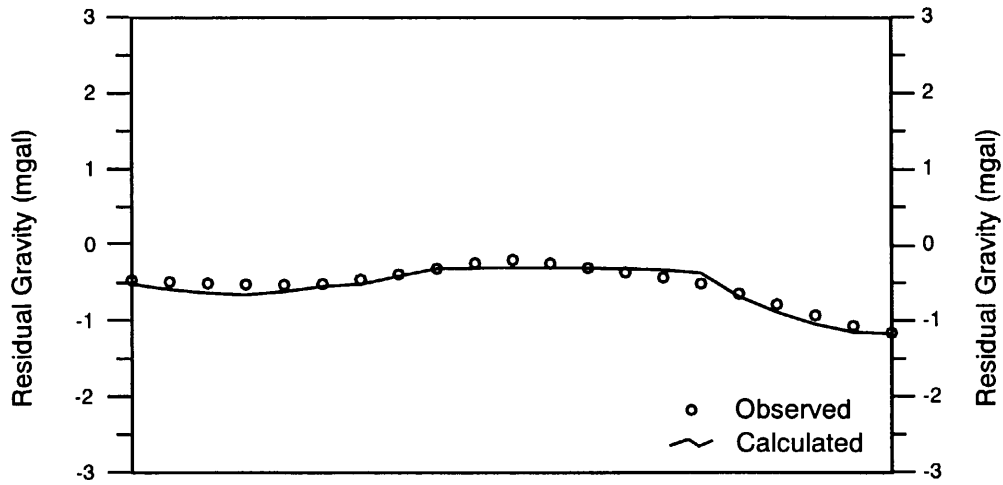


図 32

重力法解析断面図
 (測線 C9)

Scale : 10,000

March, 2001

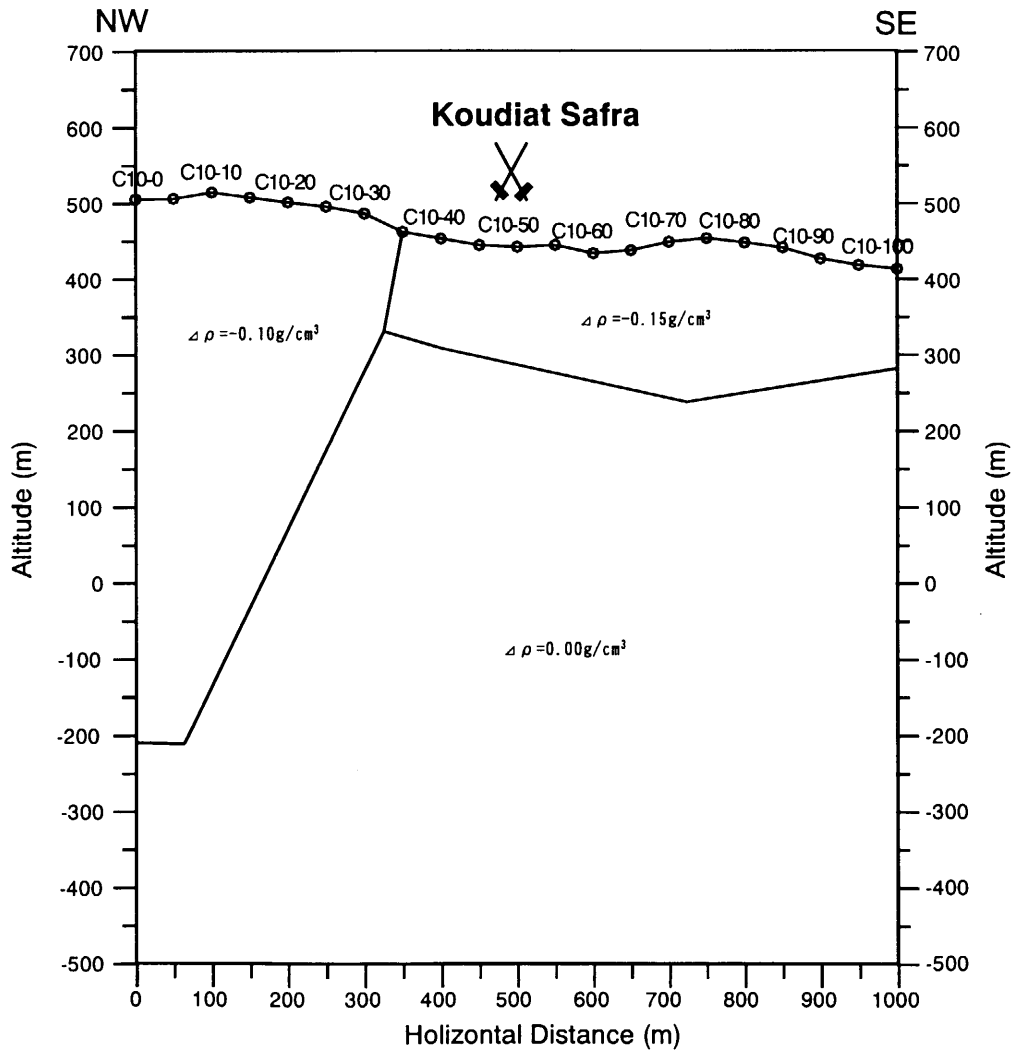
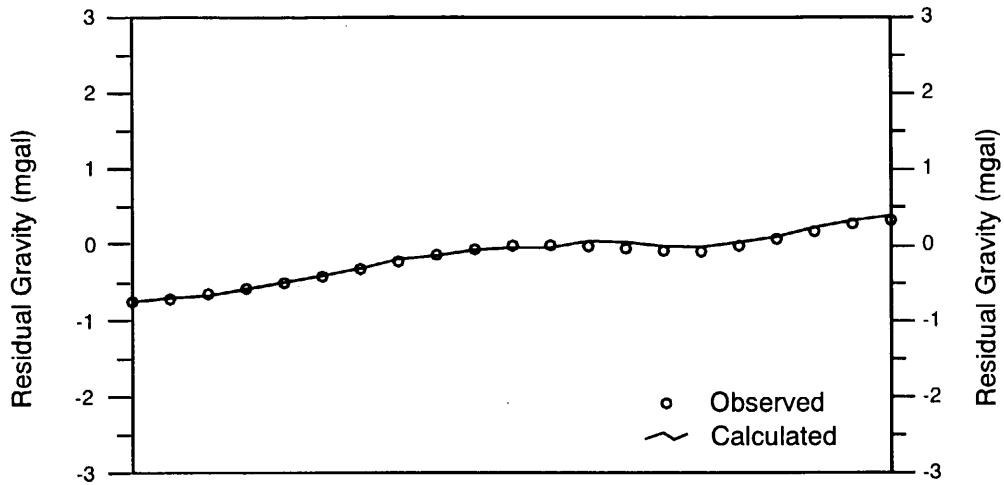


図 33
重力法解析断面図 (測線 C10)
Scale : 10,000
March, 2001

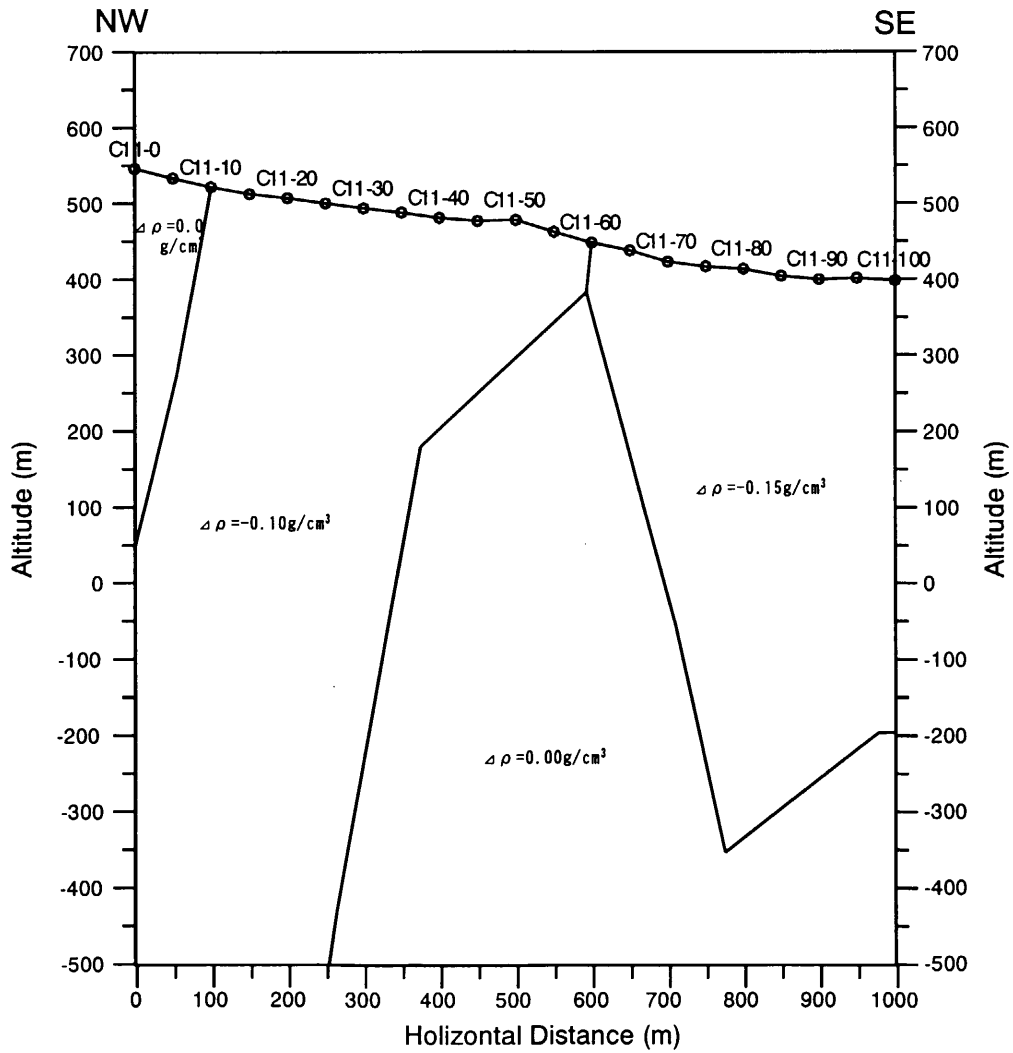
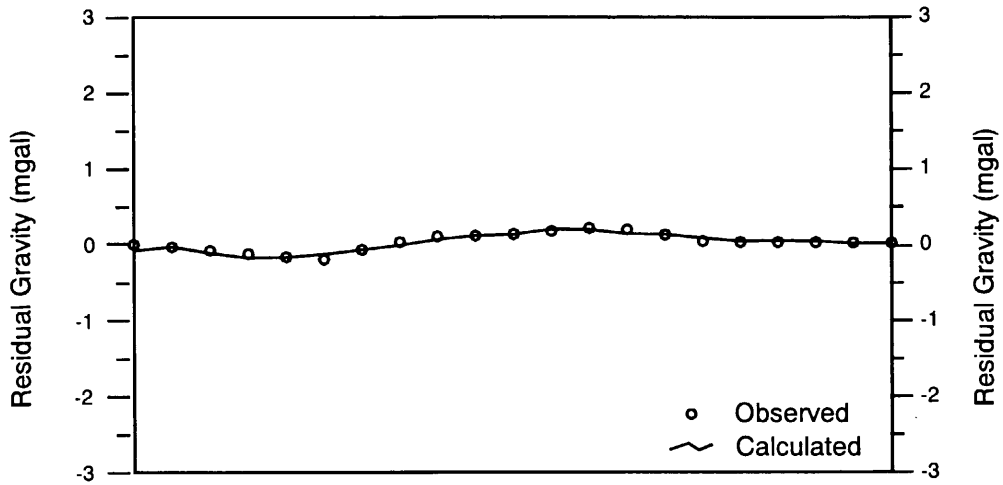


図 34

重力法解析断面図
(測線 C11)

Scale : 10,000

March, 2001

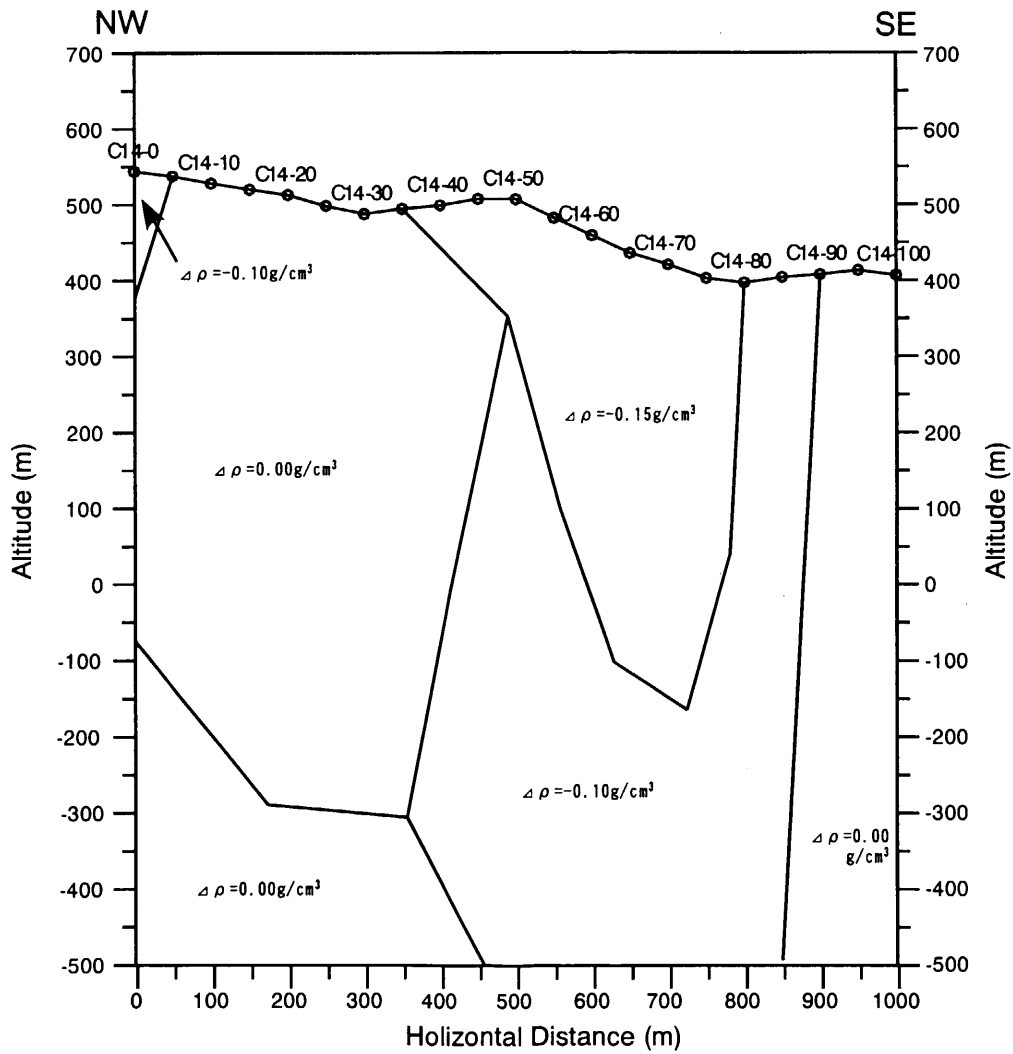
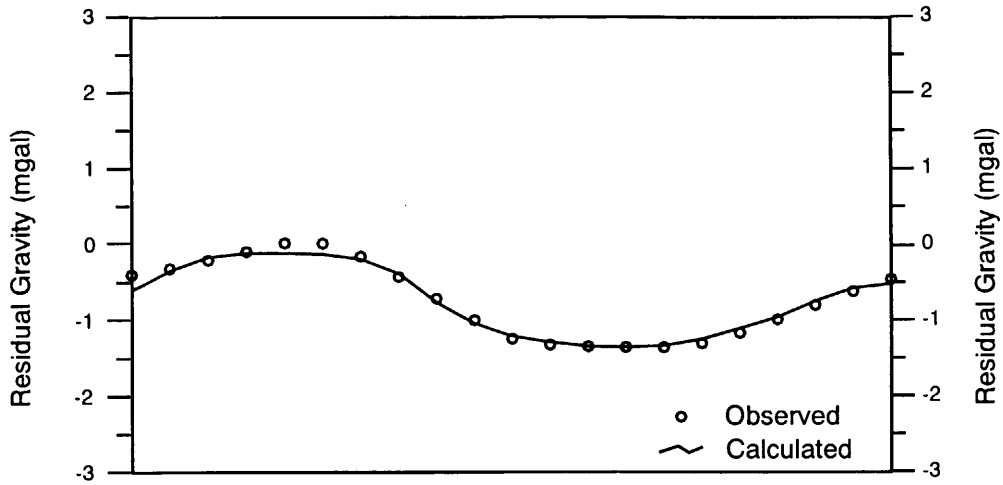


図 35
重力法解析断面図 (測線 C14)
Scale : 10,000
March, 2001

畳系のドロマイトであると考えられる。断面中央部の C14-30~80 では、三畳系の上部に第三系に対比される密度差 $-0.15\text{g}/\text{cm}^3$ の地層が厚く分布している。

・ C15 断面 (図 36)

C14 断面の北東 600m, Kou diat Soda 鉱床を通過して北西から南東に横断する断面である。C14 断面同様、断面南東部の C15-90 南東の平野側が重力基盤、北西の丘陵側が三畳系に対比される密度差 $-0.10\text{g}/\text{cm}^3$ の低密度岩体であり、断面北西部の深部にも重力基盤が分布する。Kou diat Soda 鉱床のある断面中央部 C15-30~80 に第三系に対比される低密度層があるのは C14 断面と同じであるが、密度差は $-0.25\text{g}/\text{cm}^3$ と C14 断面より低い値を示す。

・ C16 断面 (図 37)

C15 断面の北東 400m を通過して北西から南東に横断する断面である。断面中央部の C16-50~60 に重力基盤が地表付近に顔を覗かせている以外は、断面のほとんどを三畳系に対比される密度差 $-0.15\sim-0.10\text{g}/\text{cm}^3$ の低密度層が広がり、北西部の C16-15~30 は密度差 $-0.15\text{g}/\text{cm}^3$ のさらに低密度の岩体がある。中央部の重力基盤と両側の三畳系は断層で境されており、複雑な地質構造を示唆している。

・ C17 断面 (図 38)

C16 断面の北東 500m, Kou diat Tlilette 鉱徴地を通過して北西から南東に横断する断面である。断面北西部の深部には重力基盤があり、断面中央部の C17-55~60 付近では地表に顔を覗かせている。重力基盤の上位と断面南東部には第三系に対比される密度差 $-0.15\text{g}/\text{cm}^3$ の低密度層が分布し、断面北西端の地表部にだけ三畳系に対比される密度差 $-0.10\text{g}/\text{cm}^3$ の低密度層が分布する。Kou diat Tlilette 鉱徴地を挟んだ C17-20 付近と C17-60 付近にある岩体の境界は垂直に近い断層によるものであろう。

⑥ 解析平面

地質図上に特徴的な残差重力異常、重力鉛直 1 次微分図の $0\text{mgal}/\text{km}$ コンター及びブーゲ異常を重ねた解析平面図を図 39 に示した。

ブーゲ異常では Jebel Ech Chied 丘陵の三畳系の分布域は高異常となっているが、調査範囲南西部に代表されるように残差重力異常では逆に低異常を示している。Jebel Ech Chied 丘陵を形成するダイアピルは低密度岩体であるはずであり、残差重力の分布がダイアピルに相当すると考えられる。高いブーゲ異常は深部からダイアピルを押し上げるような構造を暗示しているのではないかと考えられる。

調査範囲北東部に見られるように、断層や岩体境界を示す鉛直 1 次微分の $0\text{mgal}/\text{km}$ の線は、地質図上の三畳系の南東縁にほぼ平行しているが、丘陵寄りになっている。このことは Jebel Ech Chied 丘陵から El Arrousa 平野に向かって三畳系が張り出し、実際の境界は地表よりも丘陵側に寄っていることを示唆していると考えられる。解析断面において三畳系が重力基盤に対して逆断層状に衝上していることも、この推定を支持する。

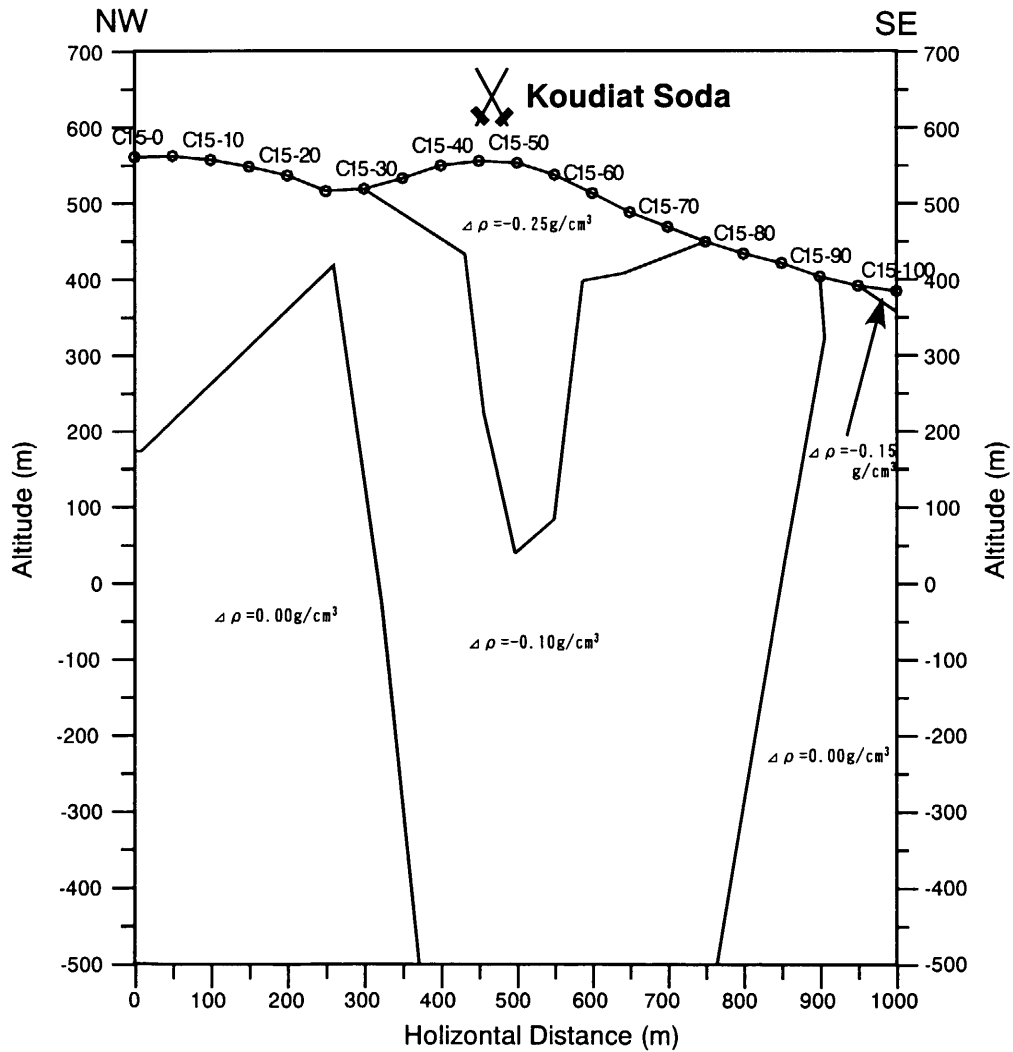
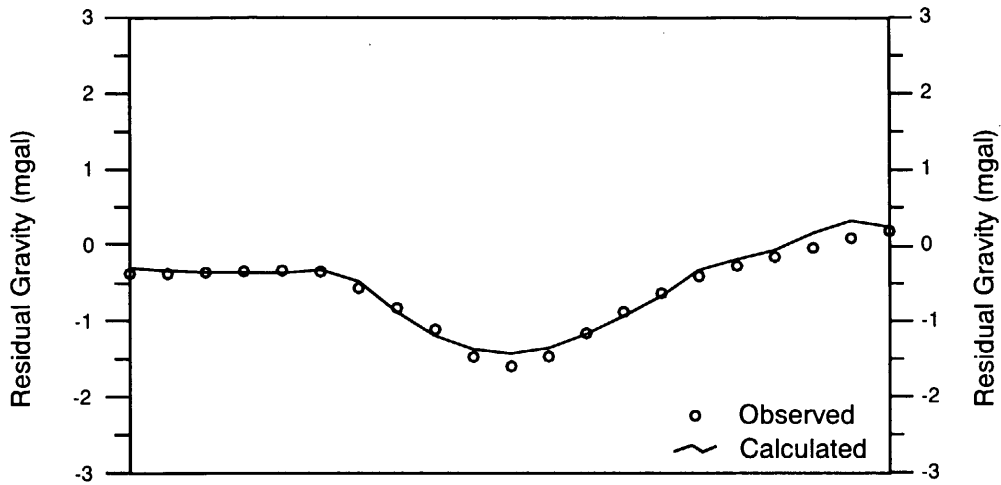


図 36

重力法解析断面図
(測線 C15)

Scale : 10,000

March, 2001

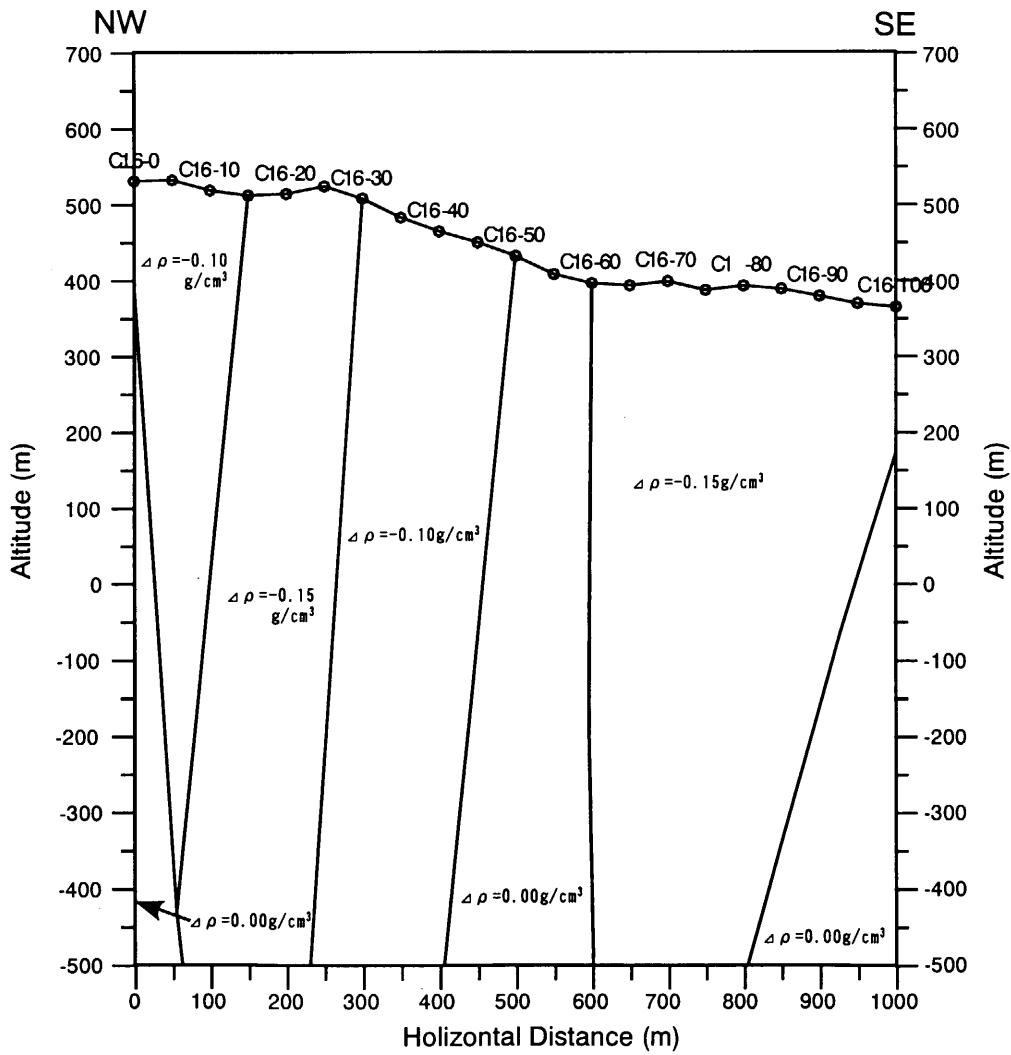
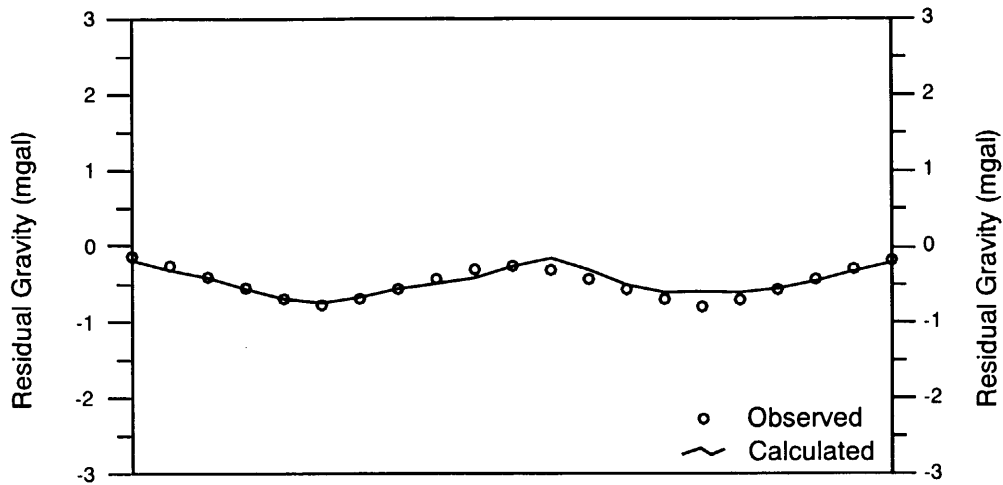


図 37

重力法解析断面図
(測線 C16)

Scale : 10,000

March, 2001

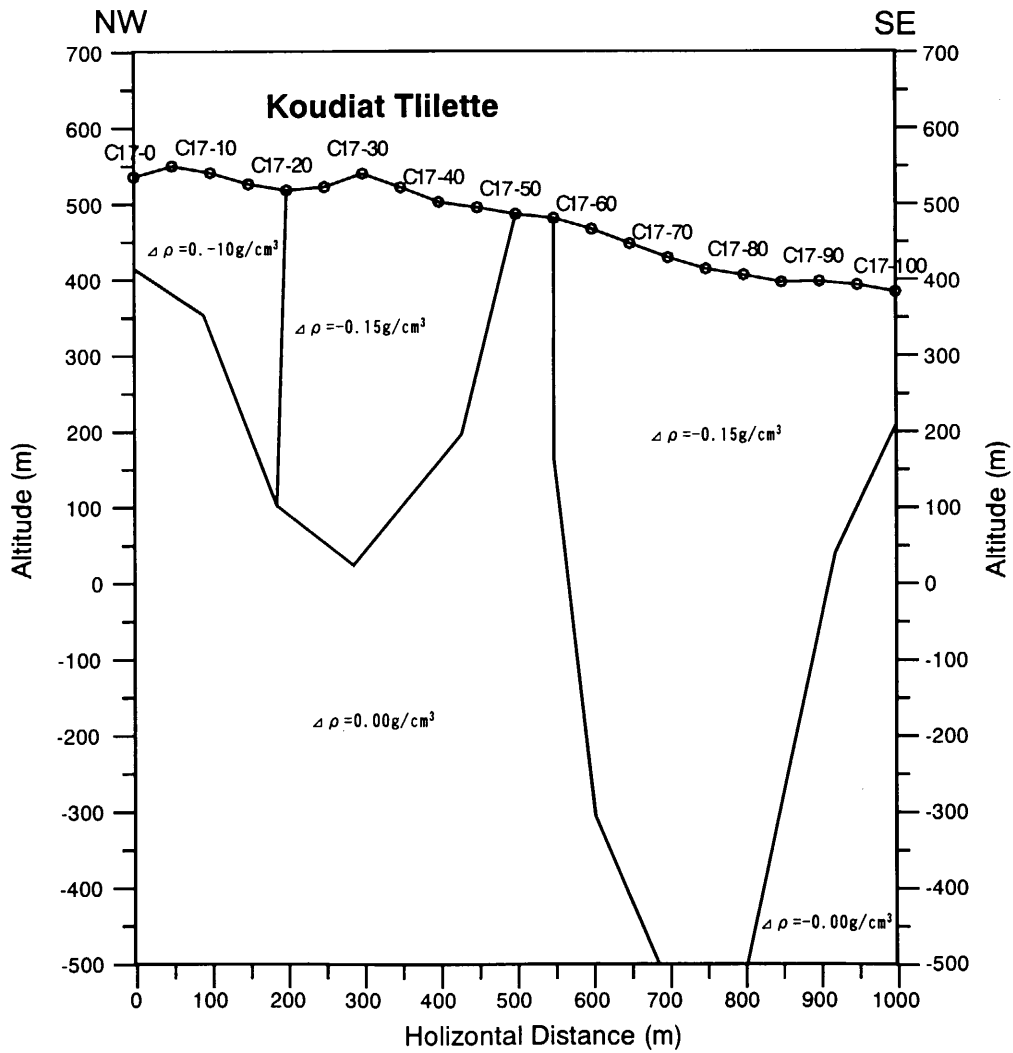
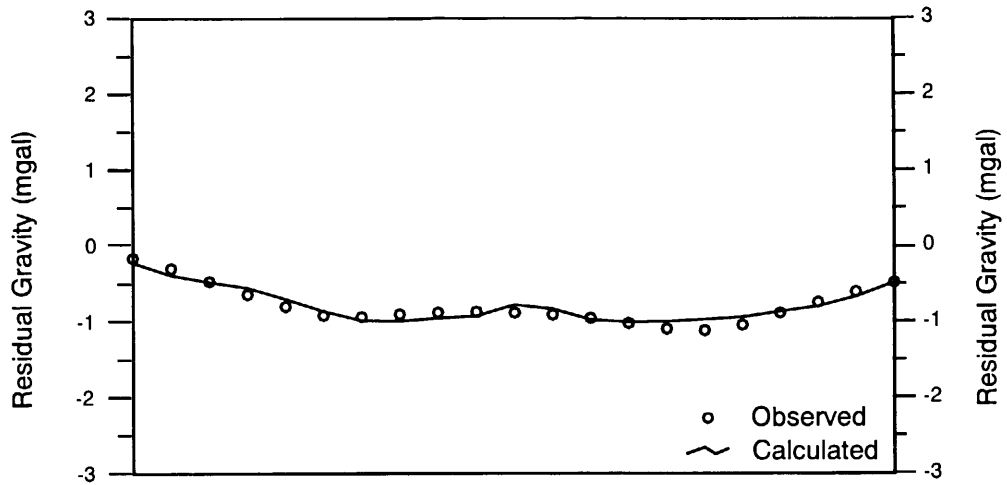


図 38

重力法解析断面図
 (測線 C17)

Scale : 10,000

March, 2001

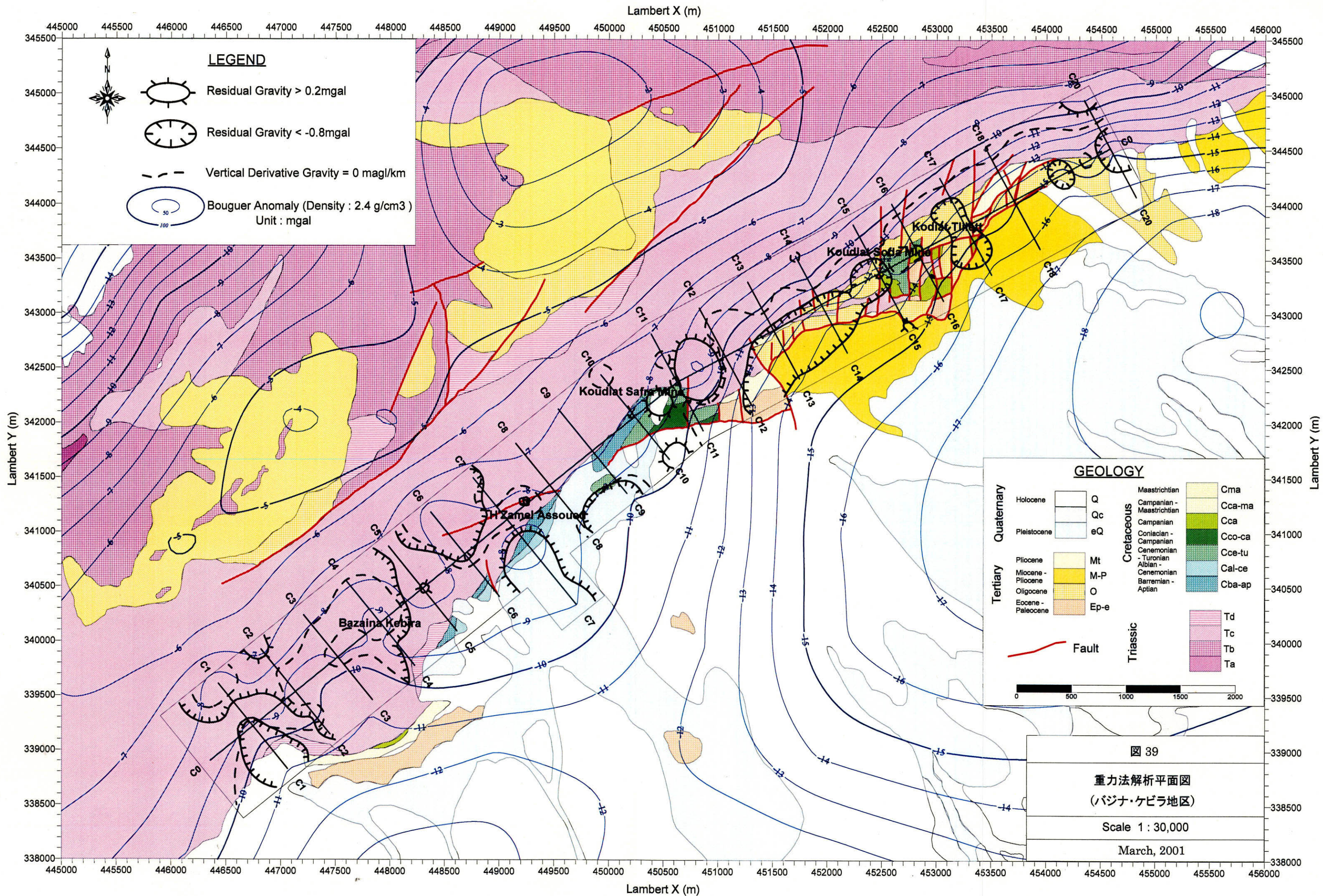


図 39

重力法解析平面図
(バジナ・ケビラ地区)

Scale 1 : 30,000

March, 2001

標高の高い所にある Bazina Kebira 鉦徴地, H'Zamel Assoued 鉦徴地, Kou diat Soda 鉦床, Kou diat Tlilett 鉦徴地は低残差重力異常の周縁部に位置し, Kou diat Safra 鉦床は異常の認められない場所に位置する。調査範囲の南西端と北東端にも同じような低異常があるが, この周辺には地質的に白亜系の分布が認められないので, 潜頭鉦床賦存の可能性は低い。

H'Zamel Assoued 鉦徴地付近は, 細く馬の背状に El Arrousa 平野の低重力異常を分断しているブーゲ異常の高異常の張り出し部で, 高残差重力の縁辺部に位置している。このような特徴は昨年度に調査したブキル地区の鉦山採掘跡付近と共通するものがある。

(3) IP 法探査結果

バジナ・ケビラ地区で実施した IP 法探査結果に見られる特徴は以下のとおりである。

① 見掛比抵抗及び測定分極率

本地区で測定された見掛比抵抗は $1\sim 5,770\Omega\text{m}$ の範囲にあり, その平均値は約 $167\Omega\text{m}$ である。調査地北西側 Jebel Ech Chied 丘陵部で $100\Omega\text{m}$ 以上の高見掛比抵抗を示し, 南東側の El Aroussa 平野に向かって低くなる傾向がある。調査地南西部では南東側まで高見掛比抵抗が張り出し, 中央部から北東部にかけては北西側だけに高見掛比抵抗が分布する。電極隔離係数 n が 1 から 4 へと大きくなるに連れて, 全般に見掛比抵抗が低くなる傾向があり, $n=3\sim 4$ の調査地北東部には高見掛比抵抗は認められない。

測定分極率は最大でも 7.8mV/V 程度で全体的に低い値を示す。低見掛比抵抗が広く分布する範囲では有意なデータが取得できていない箇所もある。調査地中央部の C-7 測線付近の H'Zamel Assoued 鉦徴地, Kou diat Safra 鉦床, 調査地北東部の Kou diat Soda 鉦床及び C-17 測線付近の Kou diat Tlilett 鉦徴地などの鉦徴地は周辺に比べて測定分極率が少し高い傾向にあるが, 調査地南西部 C-4 測線付近の Bazina Kebira 鉦徴地にそのような傾向は認められない。

以下に, 各測線の断面図及び $n=1\sim 4$ の平面図に認められる概略的な傾向について述べる。

・ C0 断面 (図 40)

調査範囲を南西から北東に縦断する断面である。断面南西部の C0-40 \sim 380 に $100\Omega\text{m}$ 以上の高見掛比抵抗が広がっている。断面中央部から北東部にかけてと南西端は $50\Omega\text{m}$ 以下の低見掛比抵抗が多く, $10\Omega\text{m}$ 以下の低見掛比抵抗異常もある。断面中央部の Kou diat Safra 鉦床付近には見掛比抵抗分布に特徴は認められないが, 断面北東部の Kou diat Soda 鉦床は $10\Omega\text{m}$ 以下の 2 つの低見掛比抵抗異常に挟まれた場所にあり, $100\Omega\text{m}$ 以上の高見掛比抵抗異常が認められる。Kou diat Tlilett 鉦徴地に近い C0-830 \sim 850 付近も浅部に弱い高比抵抗異常がある。

測定分極率は断面北東部の Kou diat Soda 鉦床付近に 5mV/V 以上の弱い異常がある以外は, 断面全体にわたって低い値を示す。断面中央部の Kou diat Safra 鉦床と C0-830 \sim 850 付近の Kou diat Tlilett 鉦徴地も 3mV/V 程度と周囲より高い分極率を示している。

・ C4 断面 (図 41)

調査地南西部を北西から南東に横断する断面である。断面全体にわたって $100\Omega\text{m}$ 以上の高見

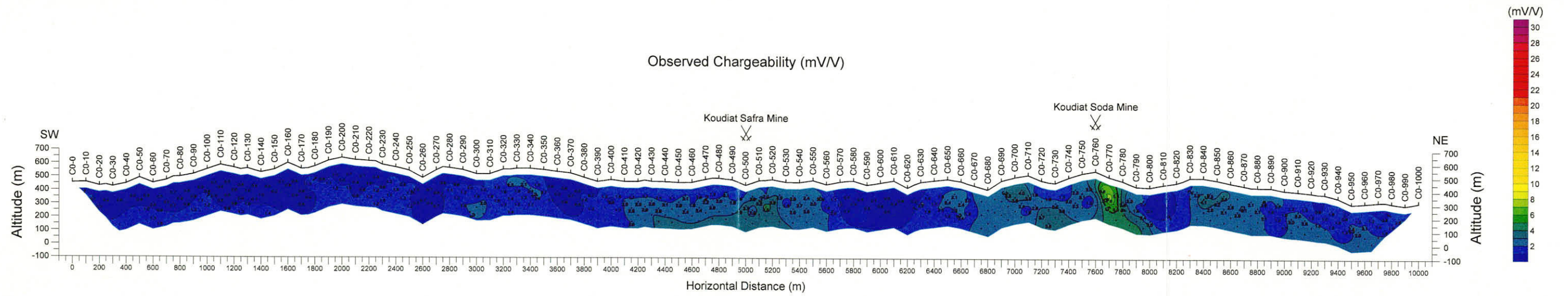
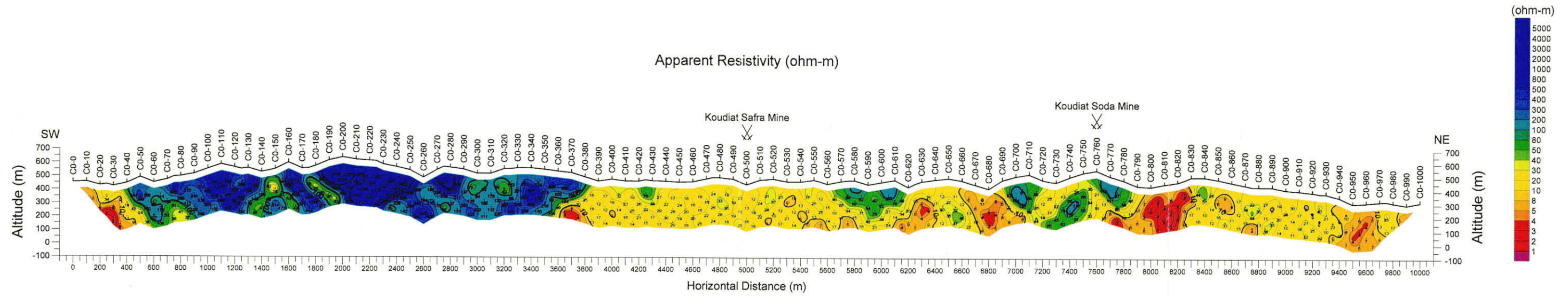


图 40 見掛比抵抗・分極率断面图 (基線 C0)

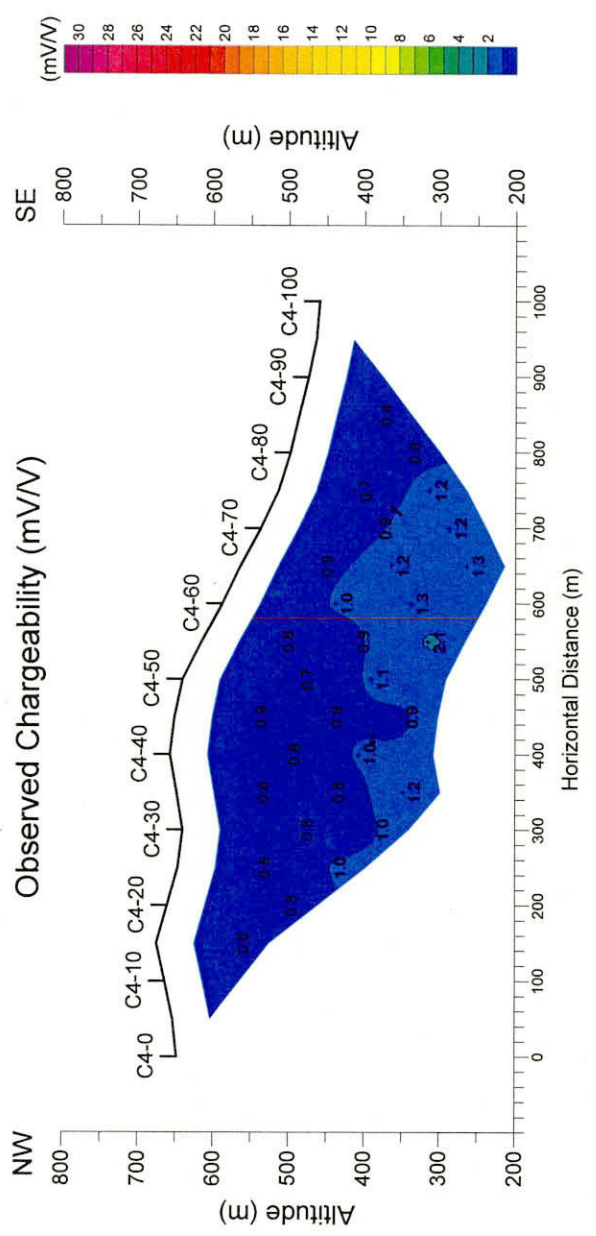
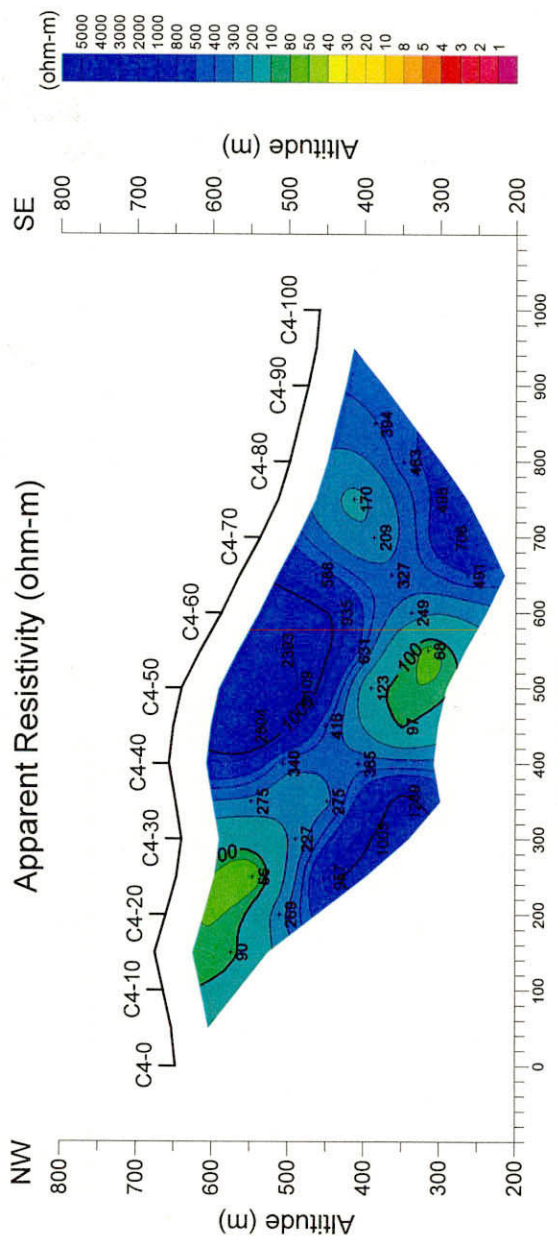


図 41 見掛比抵抗・分極率断面図 (測線 C4)

掛比抵抗が広く分布する。本断面に有意な測定分極率異常は認められない。

・ C6 断面 (図 42)

C4 断面の 1km 北東を北西から南東に横断する断面である。断面北西部から中央部にかけて 100Ωm 以上の高見掛比抵抗を示し、断面南東部は 20Ωm 以下の低見掛比抵抗異常となっている。断面中央部に 3mV/V 以上の弱い測定分極率異常があるが、有意な異常とは認められない。

・ C7 断面 (図 43)

C6 断面の 500m 北東の H'Zamel Assoued 鉱徴地を通過して北西から南東に横断する断面である。C6 断面同様、断面北西部は 100Ωm 以上の高見掛比抵抗を示し、中央部から南東部にかけては、20Ωm 以下の低見掛比抵抗が広く分布する。特に、中央部の C7-50~100 付近の深部には 10Ωm 以下の大きな低見掛比抵抗異常がある。H'Zamel Assoued 鉱徴地に相当する C7-80~100 付近には 5mV/V 程度の弱い測定分極率異常がある。

・ C9 断面 (図 44)

調査地中央部を北西から南東に横断する断面である。断面北西部は 100Ωm 以上の高見掛比抵抗を示し、中央部から南東部にかけては 20Ωm 以下の低見掛比抵抗が広く分布する。C7 断面に比べて、北西部の高見掛比抵抗の範囲が狭く、10Ωm 以下の大きな低見掛比抵抗異常は南東側に広がっている。本断面にも有意な測定分極率異常は認められない。

・ C10 断面 (図 45)

調査地域ほぼ中央の Koudiat Safra 鉱床を通過して、北西から南東に横断する断面である。C9 断面とほぼ同じように、断面北西端に 100Ωm 以上の高見掛比抵抗、中央部から南東部にかけては 20Ωm 以下の低見掛比抵抗が広く分布し、南東に向かって低くなる見掛比抵抗分布を示す。Koudiat Safra 鉱床付近は 10~20Ωm 程度の見掛比抵抗を示す。断面中央部の Koudiat Safra 鉱床付近に 4mV/V 程度の弱い測定分極率異常がある。

・ C11 断面 (図 46)

調査地中央部を北西から南東に横断する断面である。C10 断面とほぼ同じように、断面北西端に 100Ωm 以上の高見掛比抵抗、中央部から南東部にかけては 20Ωm 以下の低見掛比抵抗が広く分布し、南東に向かって低くなる見掛比抵抗分布を示す。本断面に有意な測定分極率異常は認められない。

・ C14 断面 (図 47)

調査地北東部を北西から南東に横断する断面である。断面北西部の浅部を除き、100Ωm 以下の見掛比抵抗を示す。丘陵南東斜面に相当する断面中央部 C14-50~80 の深部には、10Ωm 以下の低見掛比抵抗異常が広がっている。断面中央部の C14-60 付近には 5mV/V 以上の弱い測定分極率異常がある。

・ C15 断面 (図 48)

調査地北東部の Koudiat Soda 鉱床を通過して、北西から南東に横断する断面である。断面北西部

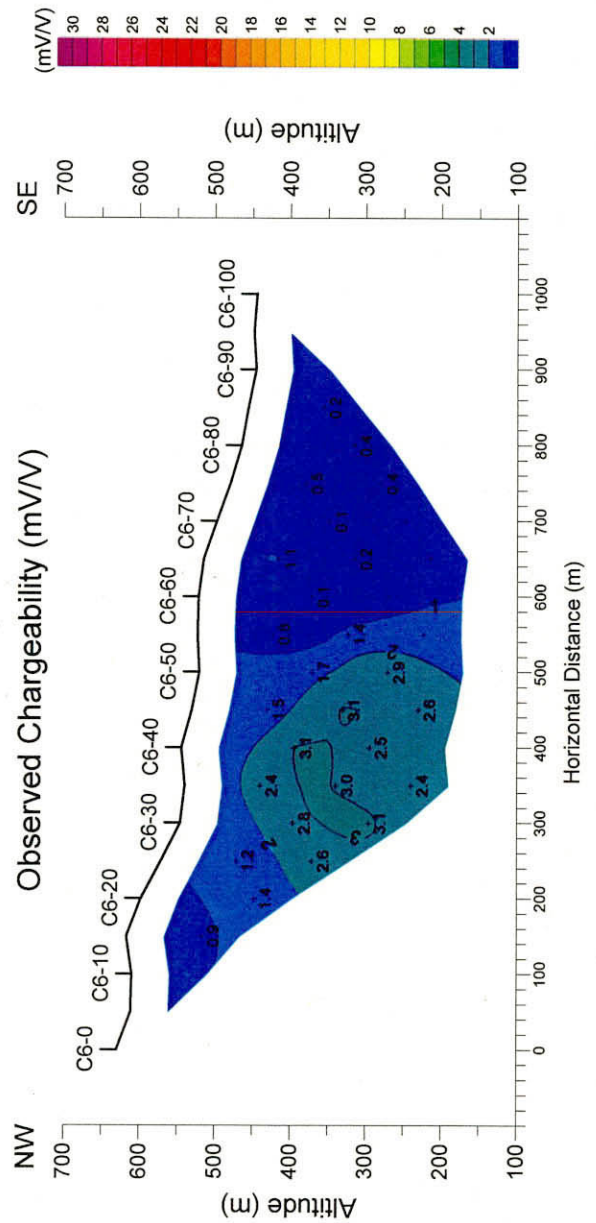
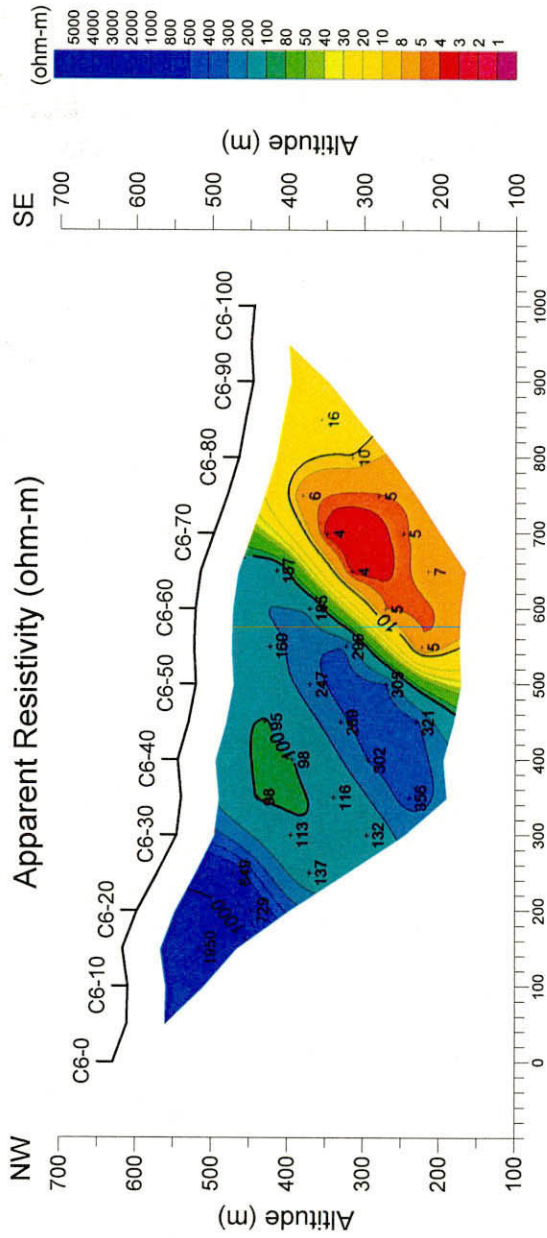


図 42 見掛比抵抗・分極率断面図 (測線 C6)

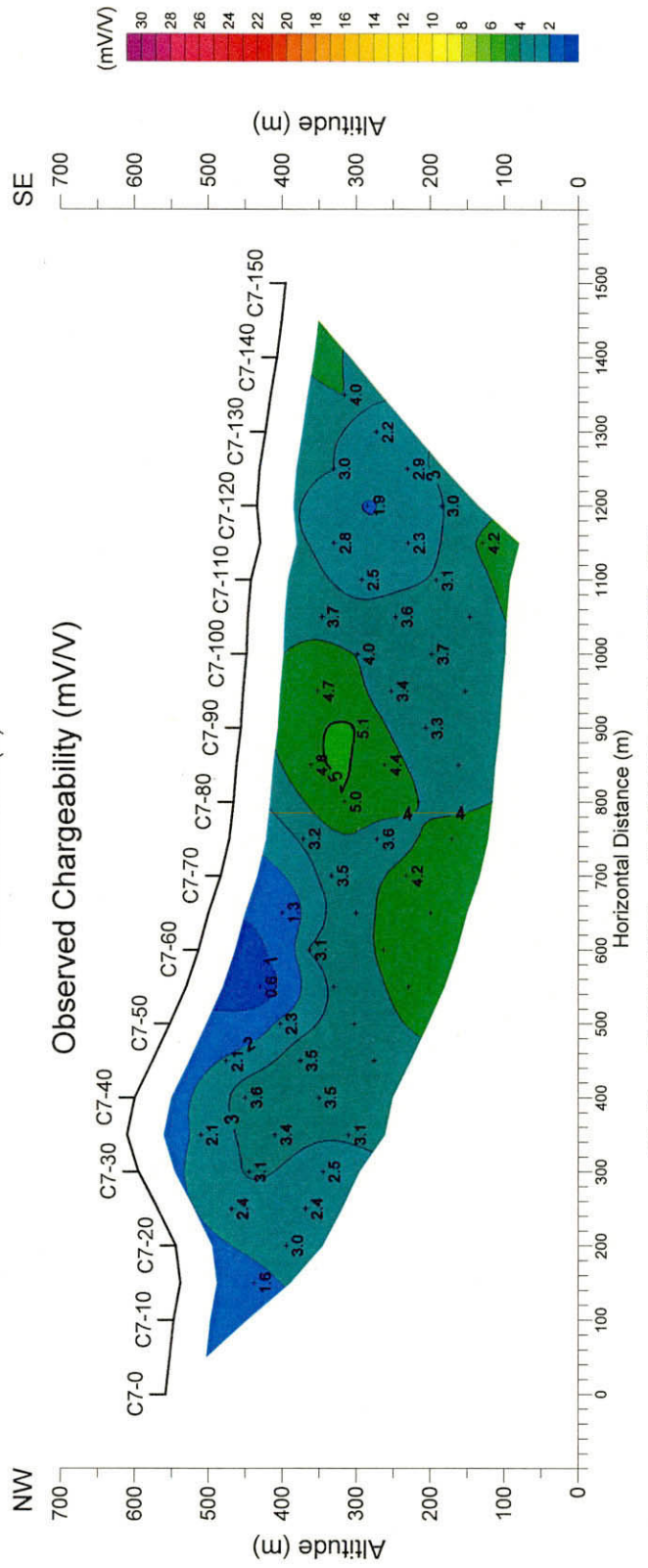
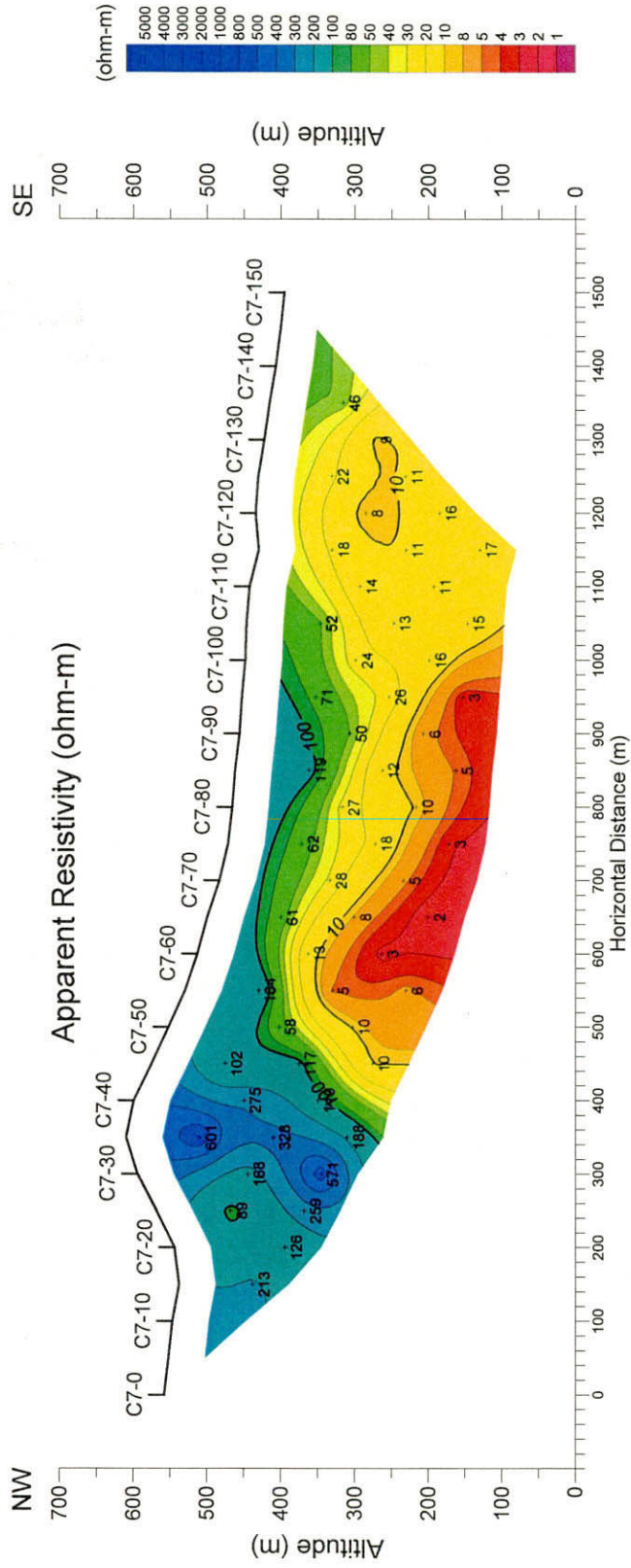


圖 43 見掛比抵抗・分極率断面図 (測線 C7)

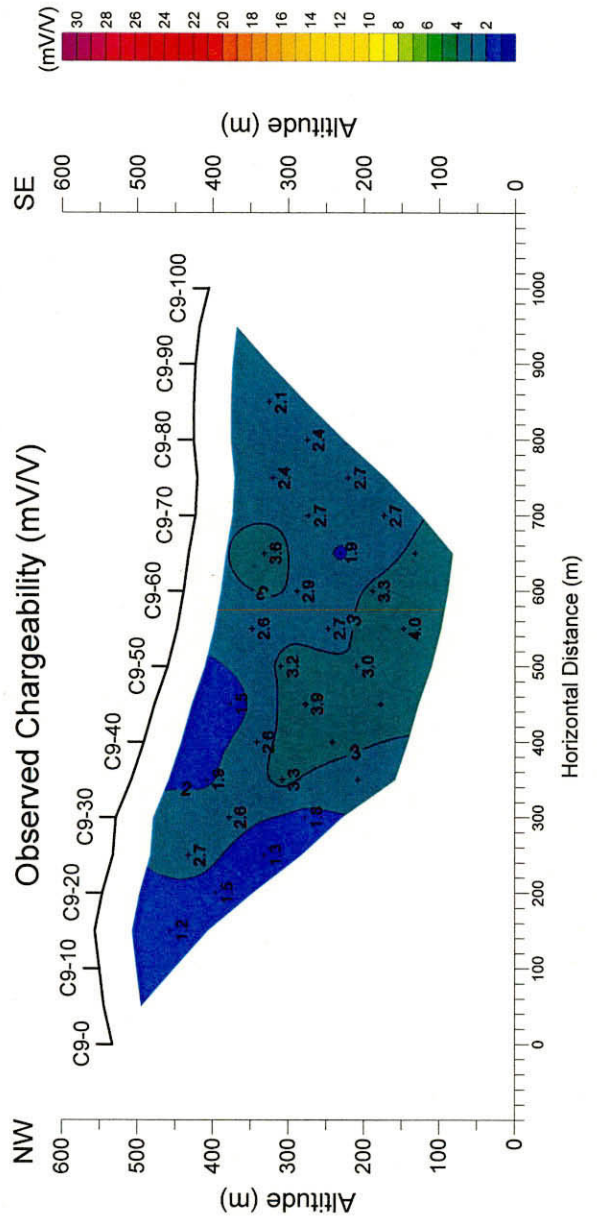
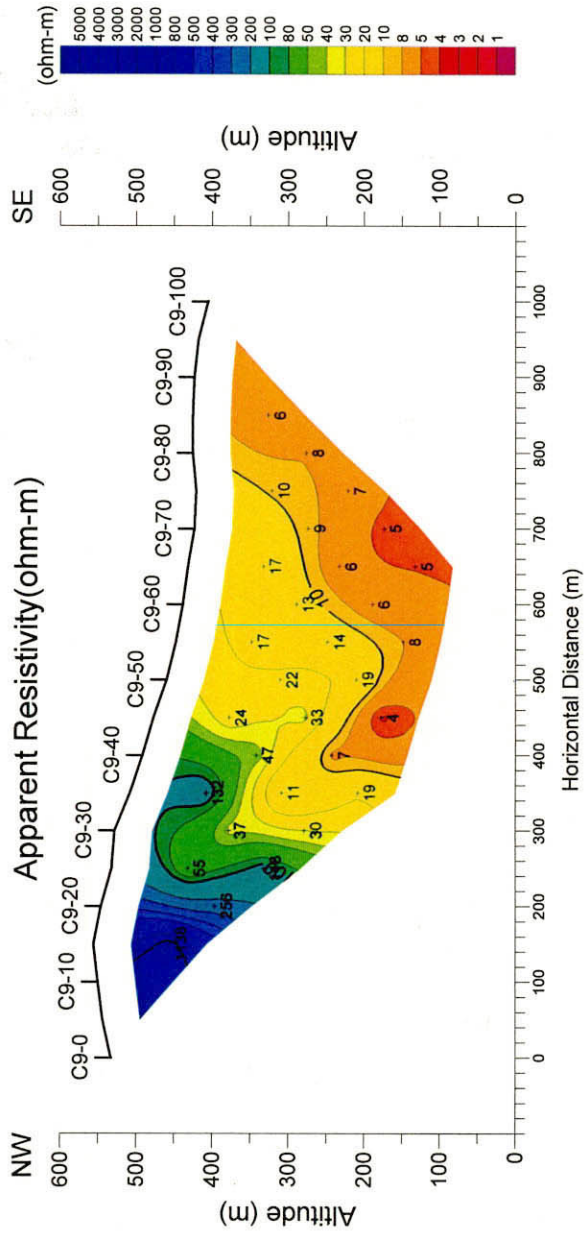


图 44 見掛比抵抗・分極率断面图 (測線 C9)

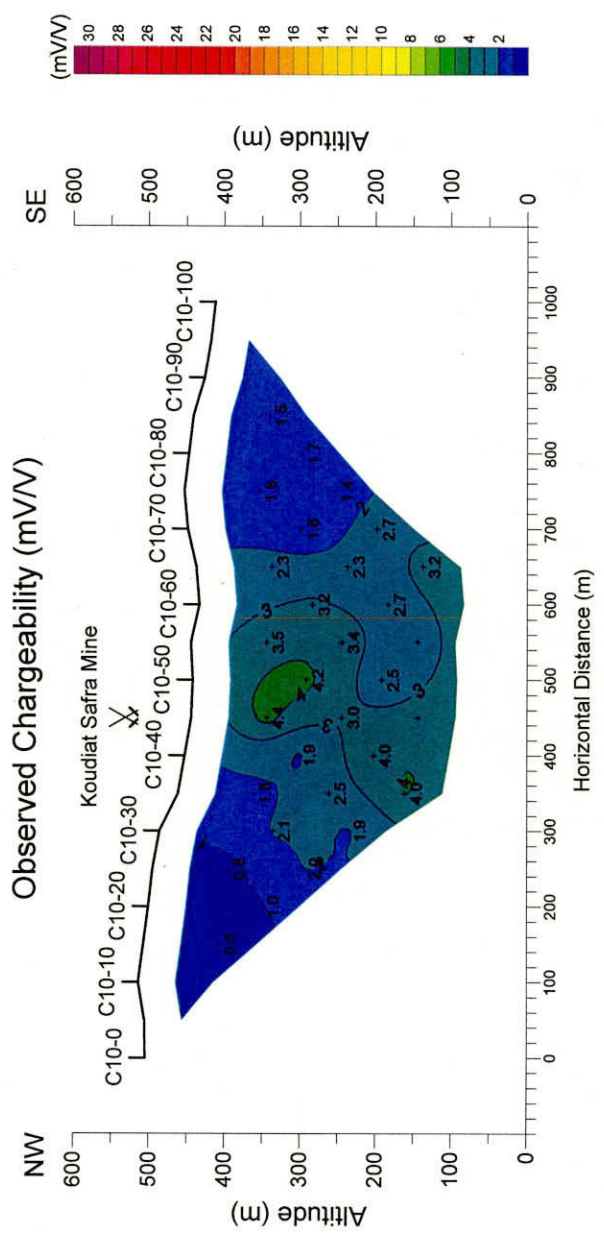
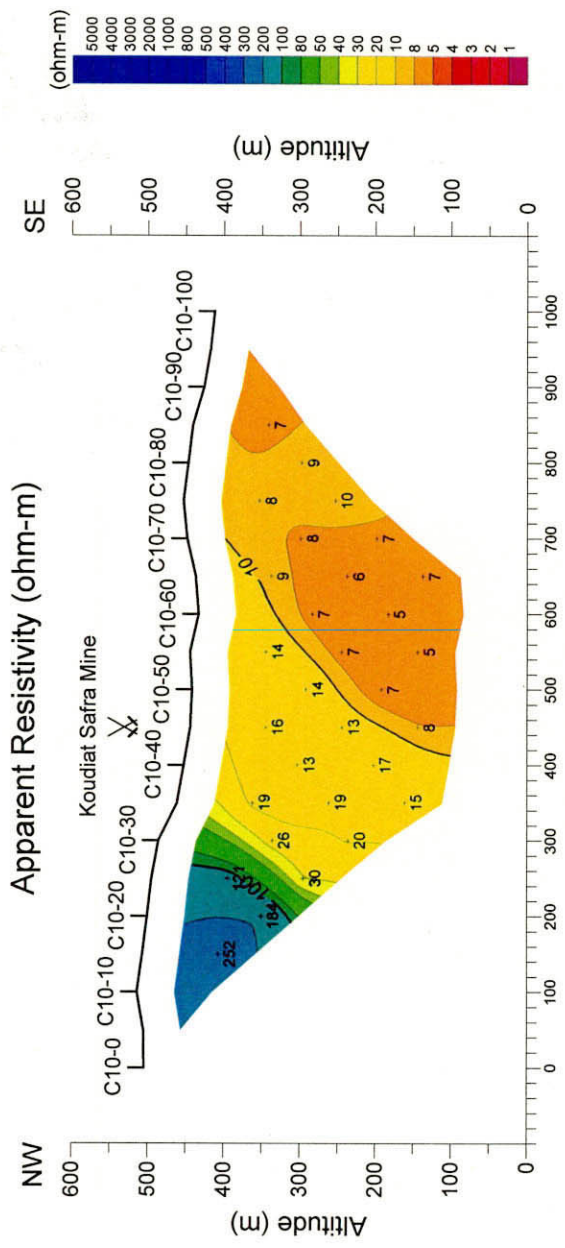


图 45 見掛比抵抗・分極率断面図 (測線 C10)

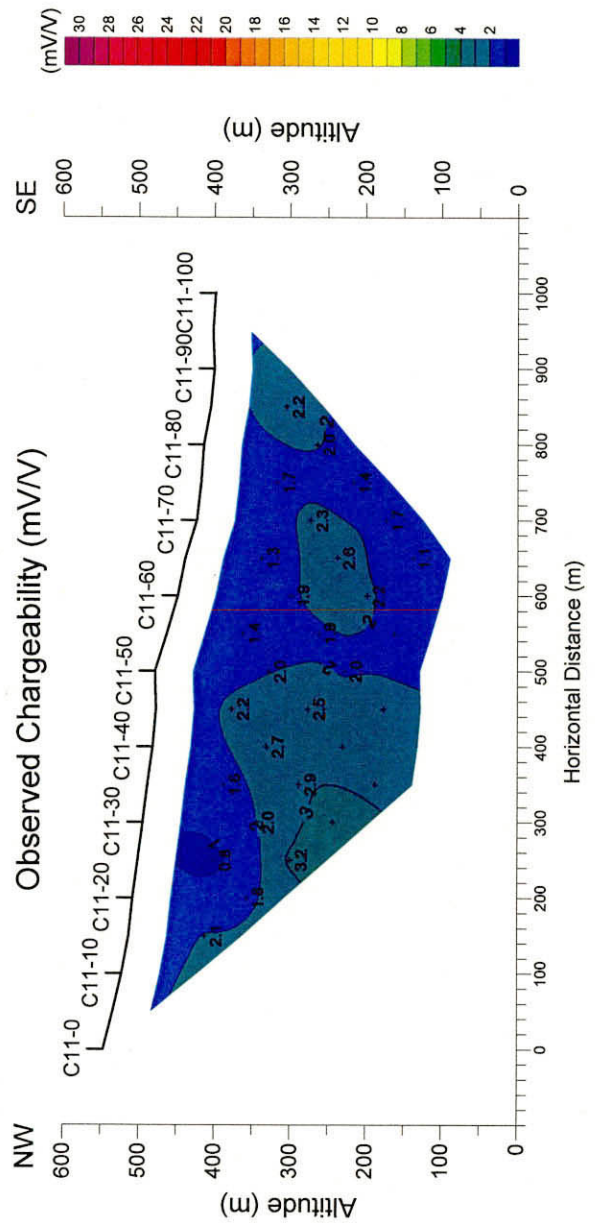
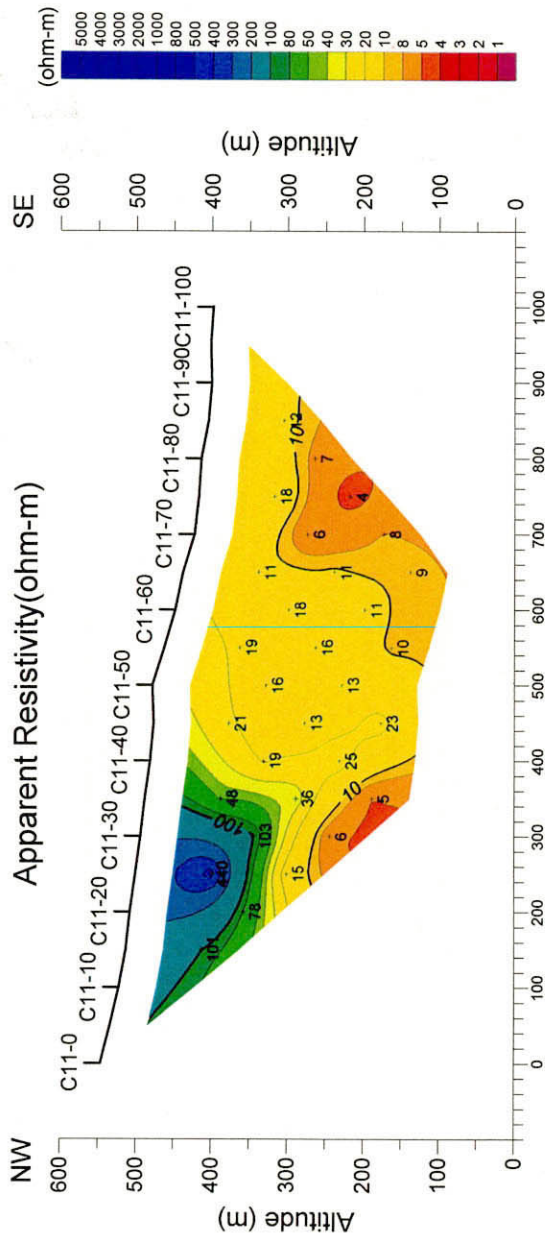


图 46 見掛比抵抗・分極率断面图 (測線 C11)

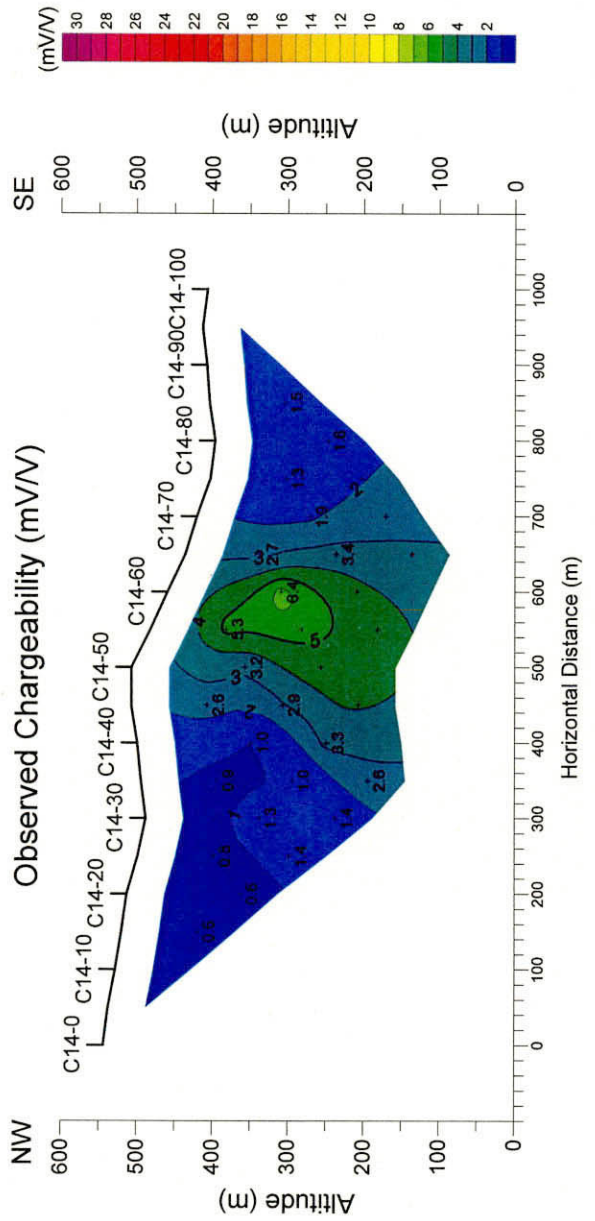
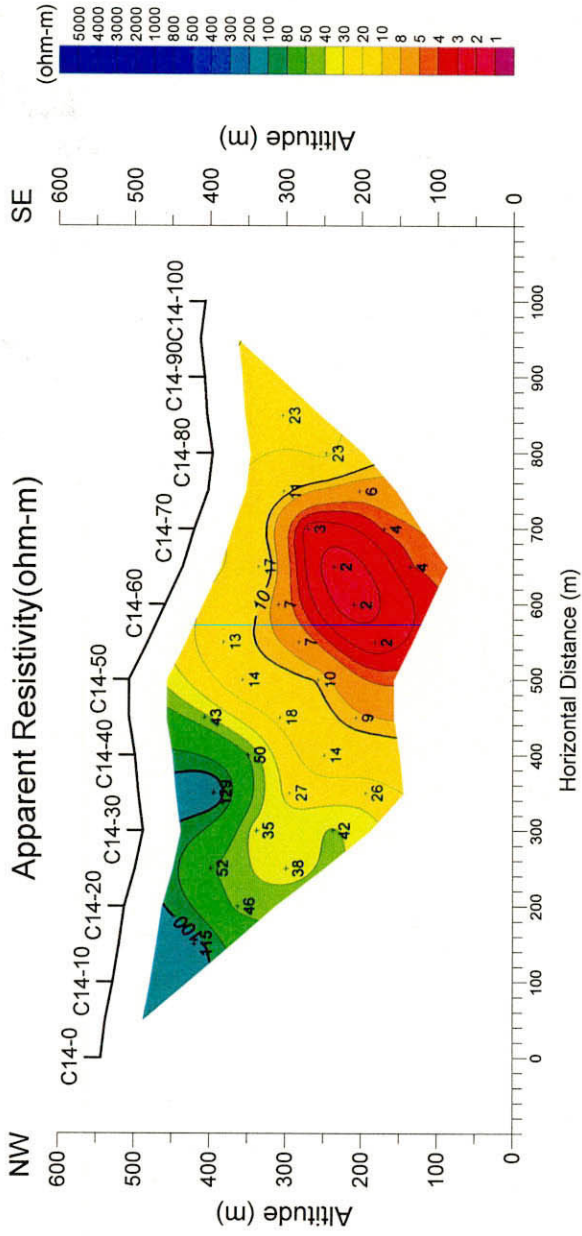


図 47 見掛比抵抗・分極率断面図 (測線 C14)

